

あ ち ごえ い せき
阿 知 越 遺 跡 III

—C地点の調査—

2012

本庄市教育委員会

序

本庄市は、かつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一誕生の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は本庄市児玉町入浅見に所在する阿知越遺跡の発掘調査成果を記録した報告書です。阿知越遺跡は生野山丘陵の西麓に展開する奈良時代から平安時代にかけての集落跡で、過去にも二度の発掘調査が実施されています。今回の調査でも、奈良・平安時代の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡1棟が検出されました。とくに、発掘調査区の北西隅で確認された9世紀後半の第28号住居跡からは、「本」の文字を記した墨書土器や須恵器の大甕、砥石が出土し、当時の生活の様子を復元するうえで重要な資料を得ることができました。

本書に報告したような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解を賜りました峯岸玲子様をはじめ、調査に際してご指導、ご協力を頂きました方々、直接作業の労にあたられた皆様に衷心よりの感謝を申し上げます。

平成24年3月

本庄市教育委員会

教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町入浅見字アチ越 1125 番地 12 に所在する阿知越遺跡 (No. 54 - 040) C地点の発掘調査報告書である。
2. 調査地点の名称については、昭和 55 年 11 月 5 日から昭和 56 年 3 月 31 日にわたり A地点が、また、昭和 56 年 1 月 10 日から昭和 56 年 3 月 31 日にわたり B地点の発掘調査が実施されていることから、本調査地点を阿知越遺跡 C地点と称する。
3. 発掘調査は、峯岸玲子氏による集合住宅建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。
4. 発掘調査は、阿知越遺跡の、176.4 m²を対象として実施した。
5. 調査期間は以下の通りである。
自 平成 23 年 6 月 7 日
至 平成 23 年 6 月 28 日
6. 発掘調査担当者は、本庄市文化財保護課 太田博之・大熊季広・的野善行があたり、発掘調査には有限会社毛野考古学研究所 山本千春が調査員として専従した。
7. 整理調査期間は、以下の通りである。
自 平成 23 年 9 月 2 日
至 平成 24 年 3 月 8 日
8. 整理および報告書刊行にかかる業務は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
9. 本書の執筆は、I を本庄市教育委員会文化財保護課が、II～VI を山本千春が担当し、編集した。
10. 本書に掲載した出土遺物、遺構・遺物の実測図ならびに写真等の資料は、掲載以外の資料を含め、本庄市教育委員会において保管している。
11. 発掘調査及び本書の作成にあたって、下記の方々や諸調査機関により御助言・御教示を賜った。記して感謝いたします。(順不同、敬称略)
峯岸玲子 (株)測研 金子彰男 坂本和俊 外尾常人 田村 誠 中沢良一 丸山 修 矢内 勲
12. 阿知越遺跡の発掘調査、整理調査および報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

阿知越遺跡 C地点 発掘調査、整理・報告書刊行組織 (平成 23 年度)

主体者	本庄市教育委員会
	教 育 長 茂木 孝彦
事務局	事 務 局 長 関和 成昭
	本庄市文化財保護課
	課 長 金井 孝夫
	副参事兼課長補佐 鈴木 徳雄
	課長補佐兼埋蔵文化財係長 太田 博之
主	幹 恋河内昭彦
主	査 大熊 季広
	松澤 浩一
主	任 松本 完
臨時職	員 的野 善行

凡 例

1. 本書所収の全体図および本文中のX・Y座標値は世界測値系第IX系に基づく。単位はmである。各遺構図における方位針は座標北をさす。
2. 本調査における遺構名称は下記の記号を使用した。
SI…住居跡、SB…掘立柱建物跡、SK…土坑、P…ピット、SD…溝跡
3. 本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。
【遺構図】 遺構全体図…1 / 160 個別遺構図…1 / 30、1 / 60
【遺物実測図】 土器…1 / 4、粘土塊・石器・銅製品…1 / 2
4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
5. 遺構断面図中のスクリーントーンは地山を示す。
6. 遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。
7. 遺物観察表中の単位は、法量はcm、重さはgである。（ ）内の数値は還元値を示す。
8. 本書中の遺物観察表に示した記号は、以下のとおりである。
A－法量、B－成形技法、C－整形・調整手法、D－胎土（材質）、E－色調、F－残存度、
G－備考、H－出土位置（層位）
9. 本書掲載の図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」・「藤岡」及び旧児玉町都市計画図1 / 2,500に加筆したものをを用いた。
10. 写真図版1には、国土交通省国土地理院撮影（2000年10月31日）の空中写真を使用した。
11. 住居跡内から出土した片岩は用途が不明だが、写真と計測値を掲載した。

目 次

序
例言
凡例
目次

挿図目次
挿表目次
写真図版目次

I	調査に至る経緯	1
II	地理的・歴史的環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	3
III	調査の方法と経過	5
IV	基本層序	5
V	検出された遺構と遺物	7
1	遺跡の概要	7
2	竪穴住居跡	7
3	掘立柱建物跡	21
4	土坑	22
5	ピット	23
6	溝跡	23
7	遺構外出土遺物	24
VI	まとめ	25

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県 の 地形 図	第 17 図	28 号 住居 跡 出 土 遺 物 (2)
第 2 図	阿 知 越 遺 跡 C 地 点 調 査 区 域 図	第 18 図	29 号 住 居 跡
第 3 図	周 辺 の 遺 跡	第 19 図	29 号 住 居 跡 出 土 遺 物
第 4 図	基 本 層 序	第 20 図	30 号 住 居 跡
第 5 図	阿 知 越 遺 跡 C 地 点 全 体 図	第 21 図	30 号 住 居 跡 出 土 遺 物
第 6 図	24 号 住 居 跡	第 22 図	31 号 住 居 跡
第 7 図	24 号 住 居 跡 出 土 遺 物	第 23 図	6 号 掘 立 柱 建 物 跡
第 8 図	25 号 住 居 跡	第 24 図	3 号 ピ ッ ト 出 土 遺 物
第 9 図	25 号 住 居 跡 出 土 遺 物	第 25 図	8 ・ 9 ・ 13 号 土 坑
第 10 図	26 号 住 居 跡 (1)	第 26 図	10 ～ 12 号 土 坑
第 11 図	26 号 住 居 跡 (2)	第 27 図	9 号 土 坑 出 土 遺 物
第 12 図	26 号 住 居 跡 出 土 遺 物	第 28 図	1 ・ 2 号 ピ ッ ト
第 13 図	27 号 住 居 跡	第 29 図	2 号 溝
第 14 図	27 号 住 居 跡 出 土 遺 物	第 30 図	2 号 溝 出 土 遺 物
第 15 図	28 号 住 居 跡	第 31 図	遺 構 外 出 土 遺 物
第 16 図	28 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (1)	第 32 図	阿 知 越 遺 跡 位 置 図

挿 表 目 次

表 1	24 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表	表 9	30 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表
表 2	25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表 (1)	表 10	3 号 ピ ッ ト 出 土 遺 物 観 察 表
表 3	25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表 (2)	表 11	9 号 土 坑 出 土 遺 物 観 察 表
表 4	26 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表	表 12	2 号 溝 出 土 遺 物 観 察 表
表 5	27 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表	表 13	遺 構 外 出 土 遺 物 観 察 表
表 6	28 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表 (1)	表 14	土 坑 計 測 表
表 7	28 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表 (2)	表 15	ピ ッ ト 計 測 表
表 8	29 号 住 居 跡 出 土 遺 物 観 察 表		

写 真 図 版 目 次

写真図版 1	遺 跡 の 位 置 と 周 辺 の 地 形 (上 が 北)	写真図版 9	6 号 掘 立 柱 建 物 跡 全 景 (南 西 か ら)
写真図版 2	調 査 区 遠 景 (東 か ら) 調 査 区 全 景 (北 西 か ら) 調 査 区 北 半 側 (西 か ら)		8 ・ 13 号 土 坑 全 景 (南 か ら) 9 号 土 坑 全 景 (東 か ら)
写真図版 3	調 査 区 南 半 側 (北 か ら) 24 号 住 居 跡 全 景 (南 西 か ら) 25 ・ 26 号 住 居 跡 全 景 (南 西 か ら)	写真図版 10	10 号 土 坑 全 景 (南 東 か ら) 11 ・ 12 号 土 坑 全 景 (北 西 か ら) 2 号 溝 全 景 (東 か ら)
写真図版 4	25 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 (北 西 か ら) 25 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 近 景 (東 か ら) 26 号 住 居 跡 カ マ ド 全 景 (南 西 か ら)	写真図版 11	24 号 住 居 跡 出 土 遺 物 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 26 号 住 居 跡 出 土 遺 物 27 号 住 居 跡 出 土 遺 物
写真図版 5	27 号 住 居 跡 全 景 (南 か ら) 27 号 住 居 跡 カ マ ド 遺 物 出 土 状 況 (南 か ら) 28 号 住 居 跡 全 景 (南 か ら)	写真図版 12	28 号 住 居 跡 出 土 遺 物 29 号 住 居 跡 出 土 遺 物
写真図版 6	28 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 (南 西 か ら) 28 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 近 景 (西 か ら) 29 号 住 居 跡 全 景 (西 か ら)	写真図版 13	30 号 住 居 跡 出 土 遺 物 9 号 土 坑 出 土 遺 物 3 号 ピ ッ ト 出 土 遺 物 2 号 溝 出 土 遺 物 遺 構 外 出 土 遺 物
写真図版 7	29 号 住 居 跡 カ マ ド 全 景 (西 か ら) 30 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 (南 西 か ら) 30 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 近 景 (南 西 か ら)		
写真図版 8	30 号 住 居 跡 全 景 (南 西 か ら) 30 号 住 居 跡 カ マ ド 全 景 (南 西 か ら) 31 号 住 居 跡 全 景 (西 か ら)		

I 調査に至る経緯

平成 22 年 12 月 8 日、峯岸玲子氏より本庄市児玉町入浅見字アチ越 1125-12 の土地、804 m²にアパート建築工事の計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 阿知越遺跡（県遺跡番号 54 - 040）が所在することが判明した。

阿知越遺跡では、過去に A 地点、B 地点と二箇所の発掘調査が行われ、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡が多く検出されている。A・B 両地点は 150m 程離れているが、標高をほぼ同じくする西向きの緩斜面上に立地し、遺構の構成も同様であることから一連の集落と考えられる。今回の開発予定地は 2 地点の間であり、標高・地形もそれらとほぼ同じであるといえることから、やはり関連する集落遺構が所在する可能性が考えられた。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成 23 年 4 月 6 日、7 日に現地調査を実施した。その結果、敷地の北西側を中心に竪穴住居跡等の埋蔵文化財を検出した。

本庄市教育委員会は、以上の試掘調査の成果に基づき『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である阿知越遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定により、『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後、事業主体者と本庄市教育委員会は、先の試掘調査結果等をふまえ、数度にわたり協議し、埋蔵文化財が現状で保存できるよう調整を行った。その結果、検出された文化財の大部分が破壊される当初計画から、ほぼ全体に盛土を行い極力文化財を保護する設計へと変更が行われたが、盛土に伴う擁壁の基礎部分に関しては構造上、文化財の破壊が避けられないこととなり、当該部分に関してはやむを得ず発掘調査を実施し記録保存することとなった。

平成 22 年 12 月 8 日付けで、事業主体者より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では、同届出を平成 23 年 5 月 31 日付本教文発第 55 号で埼玉県教育委員会あてに進達し、また平成 23 年 5 月 31 日付本教文発第 56 号で本庄市教育委員会教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会教育長に提出された。平成 23 年 8 月 18 日付教生文第 5 - 554 号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

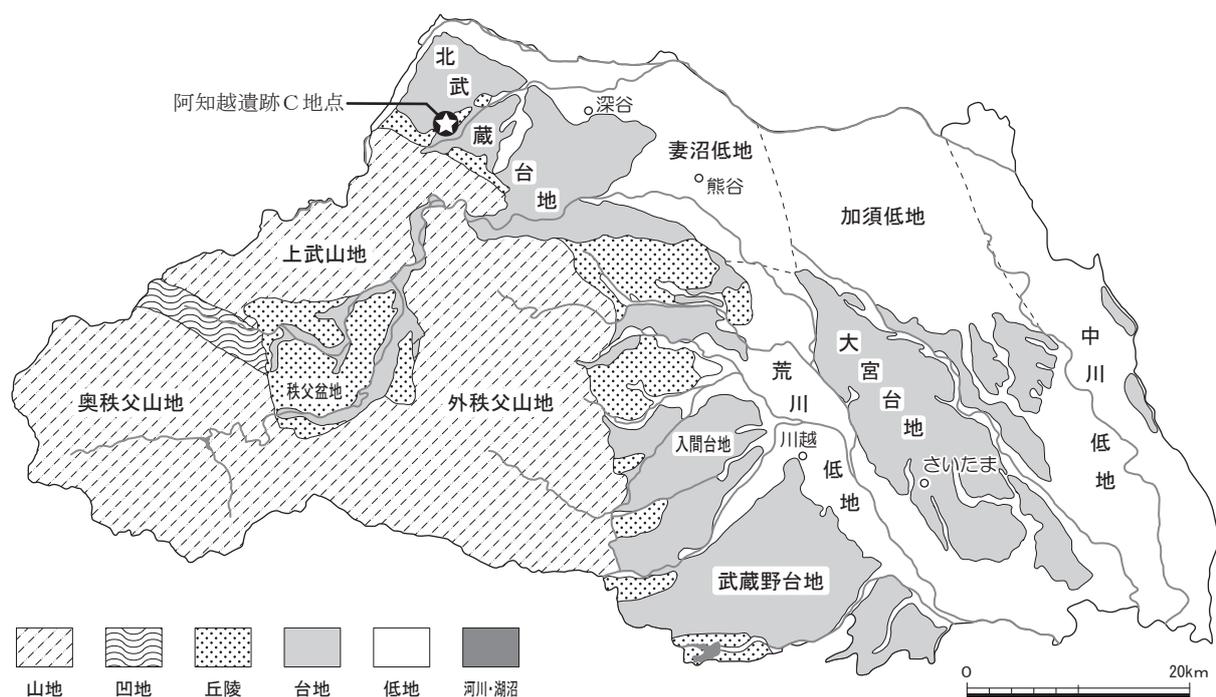
(本庄市教育委員会文化財保護課)

Ⅱ 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

本庄市は埼玉県の北西部に位置し、東は深谷市および児玉郡美里町、西は児玉郡神川町、南は秩父郡皆野町および長瀨町、北西は児玉郡上里町、また北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接する。

本遺跡は平成18年1月10日に旧本庄市と合併した旧児玉町の、本庄台地上に存在する生野山丘陵の西側裾部近くに位置する。本遺跡地は北東から南西に向けて傾斜し、標高は95～97mである。旧児玉町の地形は八王子－高崎構造線が東西に横断していることから、南西側の上武山地（陣見山・不動山）と児玉丘陵、北東側の本庄台地や低地性沖積地から成る。生野山丘陵は、児玉丘陵から小河川の浸食によって分割されて独立した第三紀層の残丘で、本庄台地上にはこの他に大久保山（浅見山）などが点在している。本庄台地は市域の北西側に展開し、利根川の支流である神流川によって形成された扇状地性の台地である。この扇状地には、本庄市児玉町宮内を起源とする女堀川によって開析された沖積地が展開し、河川沿いでは自然堤防が発達する。さらに、生野山丘陵の南側には上武山地内の秩父郡皆野町金沢付近を起源とする小山川が流下し、河岸段丘を形成している。生野山丘陵下には、両河川によって形成された台地や低地性沖積地が広がる。

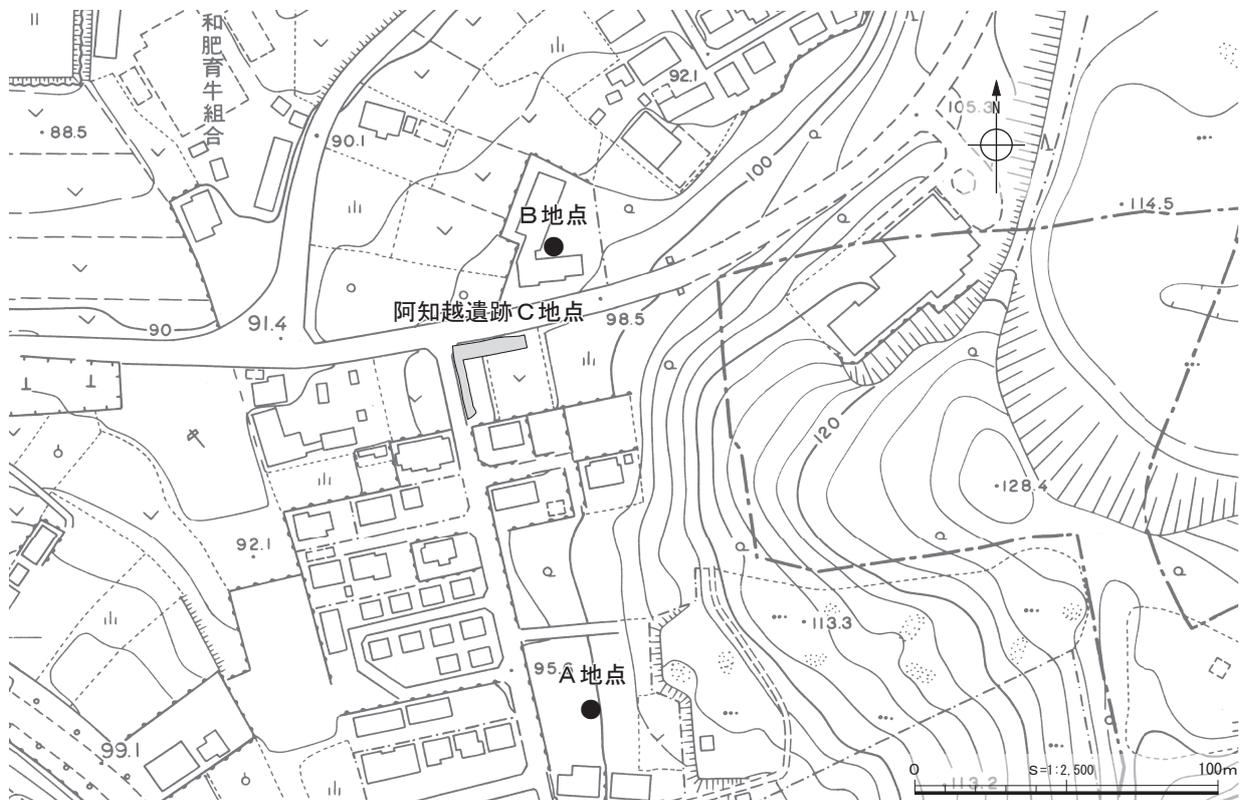


第1図 埼玉県の地形図

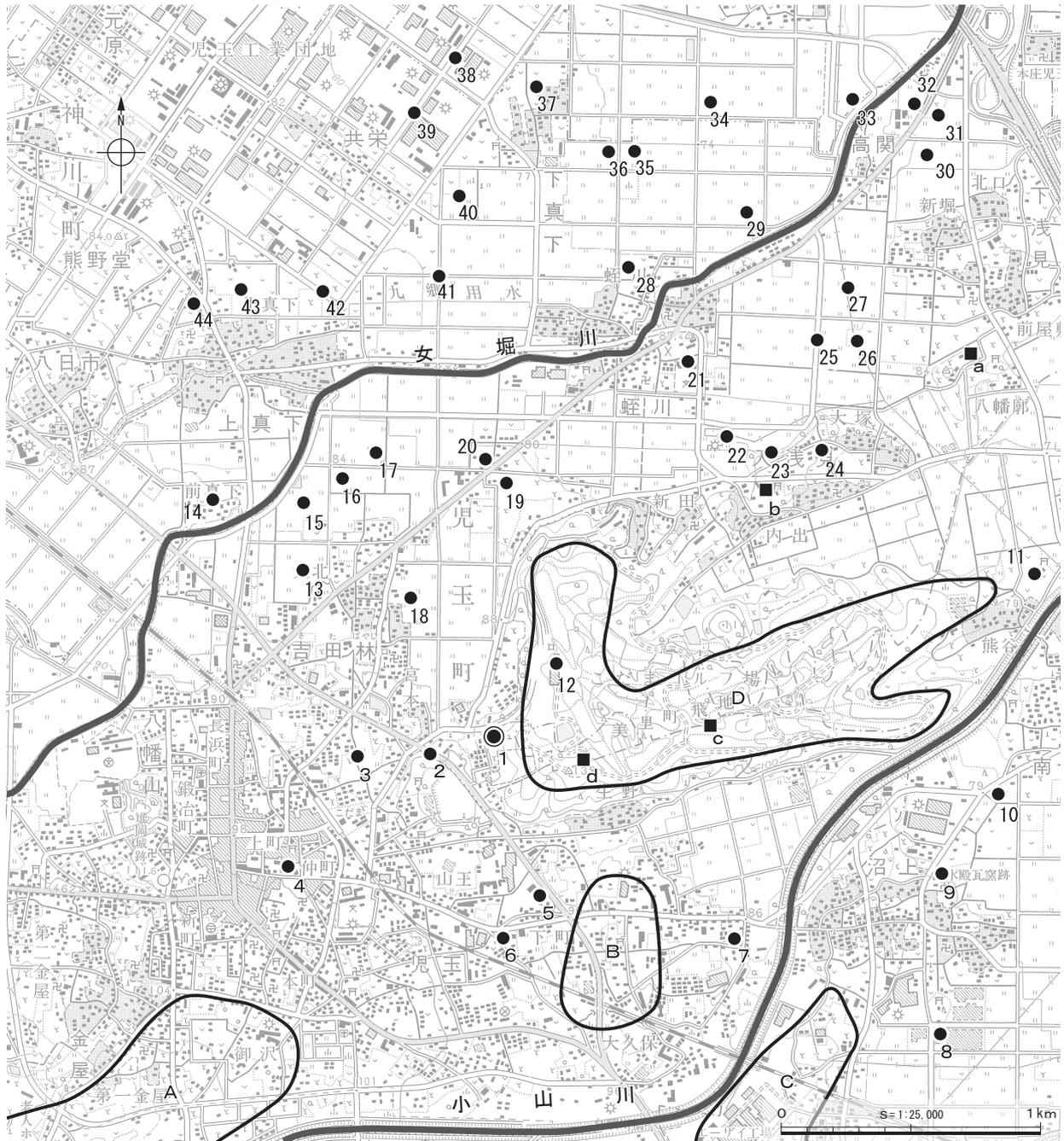
2 歴史的環境

本遺跡が所在する生野山丘陵は、約 100 基から成る「生野山古墳群」が知られる。しかし、古墳群は主に丘陵の南側や東側斜面地に築造されている傾向にあるため、本遺跡周辺では稀薄である。今回の発掘調査においても古墳の検出はなく、阿知越遺跡 A・B 地点と同時期に形成された集落跡が確認された。ここでは本遺跡周辺を中心とした、古墳時代から奈良・平安時代における集落跡および墓域の形成の変遷について概観してみたいと思う。

本庄市域では、古墳時代前期に入ると女堀川流域の水田開発と共に集落が大幅に増加し、大規模な集落である後張遺跡をはじめ、本庄台地縁辺部や、低台地の微高地や残丘などにも小規模な集落が形成される。このような低地域を臨む地点に鷲山古墳、生野山丘陵上に位置する物見塚古墳が築造される。中期に入ると低地帯でも灌漑が行われるようになり、集落の拡大等もみられる一方で、生野山丘陵では集落の形成が途絶え、生野山将軍塚古墳や金鑽神社古墳あるいは公卿塚古墳が築造され、墓域としての占地をみせる。このことから、集落形成地と墓域との意識的な区分をもった土地利用がなされていたものと考えられる。生野山丘陵のこうした傾向は後期に入っても継続し、群集墳である生野山古墳群が形成される。7 世紀中葉以降になると、集落は低地内の自然堤防上から本庄台地縁辺部や残丘下の低地上に移行する傾向をみせる。なお、前者の本庄台地縁辺部に形成された集落は 9 世紀前半になると衰退し、9 世紀後半から 10 世紀にかけて小規模な集落が低地内の自然堤防上や微高地上に形成される。これに対し、本遺跡や御林下遺跡などの本庄台地縁辺部や残丘下の低地上に形成された集落は、概ね 10 世紀まで継続する傾向が見られる。



第 2 図 阿知越遺跡 C 地点調査区域図



1. 阿知越C 2. 御林下 3. 女池 4. 町後東 5. 児玉清水 6. 児玉大天白 7. 児玉大久保 8. 宮下
 9. 水殿瓦窯跡 10. 樋之口 11. 宮ヶ谷戸 12. 吉田林割山 13. 高縄田 14. 金佐奈 15. 樋越 16. 鶴蒔 17. 石橋
 18. 宮田 19. 南街道 20. 辻堂 21. 共和小学校校庭 22. 城ノ内 23. 日延 24. 新屋敷 25. 東田 26. 浅見境
 27. 浅見境北 28. 左口 29. 柿島 30. 東牧西分 31. 梅沢 32. 川越田 33. 今井川越田 34. 前田甲 35. 藤塚
 36. 堀向 37. 将監塚東 38. 将監塚 39. 古井戸 40. 平塚 41. 中下田 42. 新宮 43. 辻之内 44. 真下境東
 A. 長沖古墳群 B. 下町大久保古墳群 C. 広木大町古墳群 D. 生野山古墳群
 a. 鷺山古墳 b. 金鑽神社古墳 c. 生野山将軍塚古墳 d. 物見塚古墳

第3図 周辺の遺跡

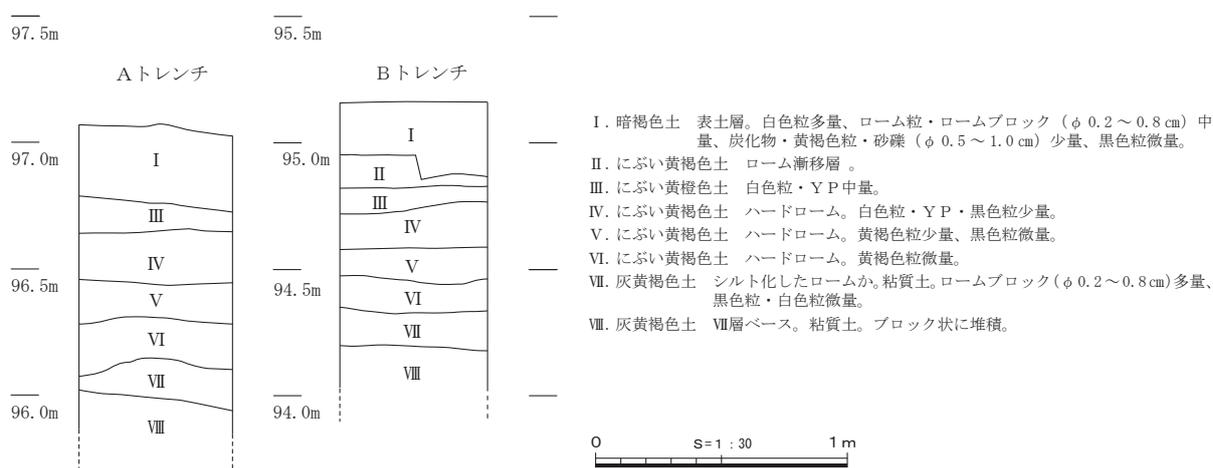
Ⅲ 調査の方法と経過

発掘調査は、平成23年6月8日から平成23年6月28日にかけて実施した。表土掘削は試掘調査の成果等を参考に、遺構確認面をローム上面として掘り下げた。その後、ジョレン等を使用し、人力による遺構検出作業を行った。遺構の掘削にあたっては、土層観察用のベルトの設定および半截によって各遺構の埋没状況や構築状態の把握に努めた。なお、各種遺構名は阿知越遺跡A・B地点からの連番である。遺構測量は、各遺構の平面図および断面図を縮尺1/20を基準として作成した。写真撮影は35mmモノクロフィルムとデジタルカメラを使用した。

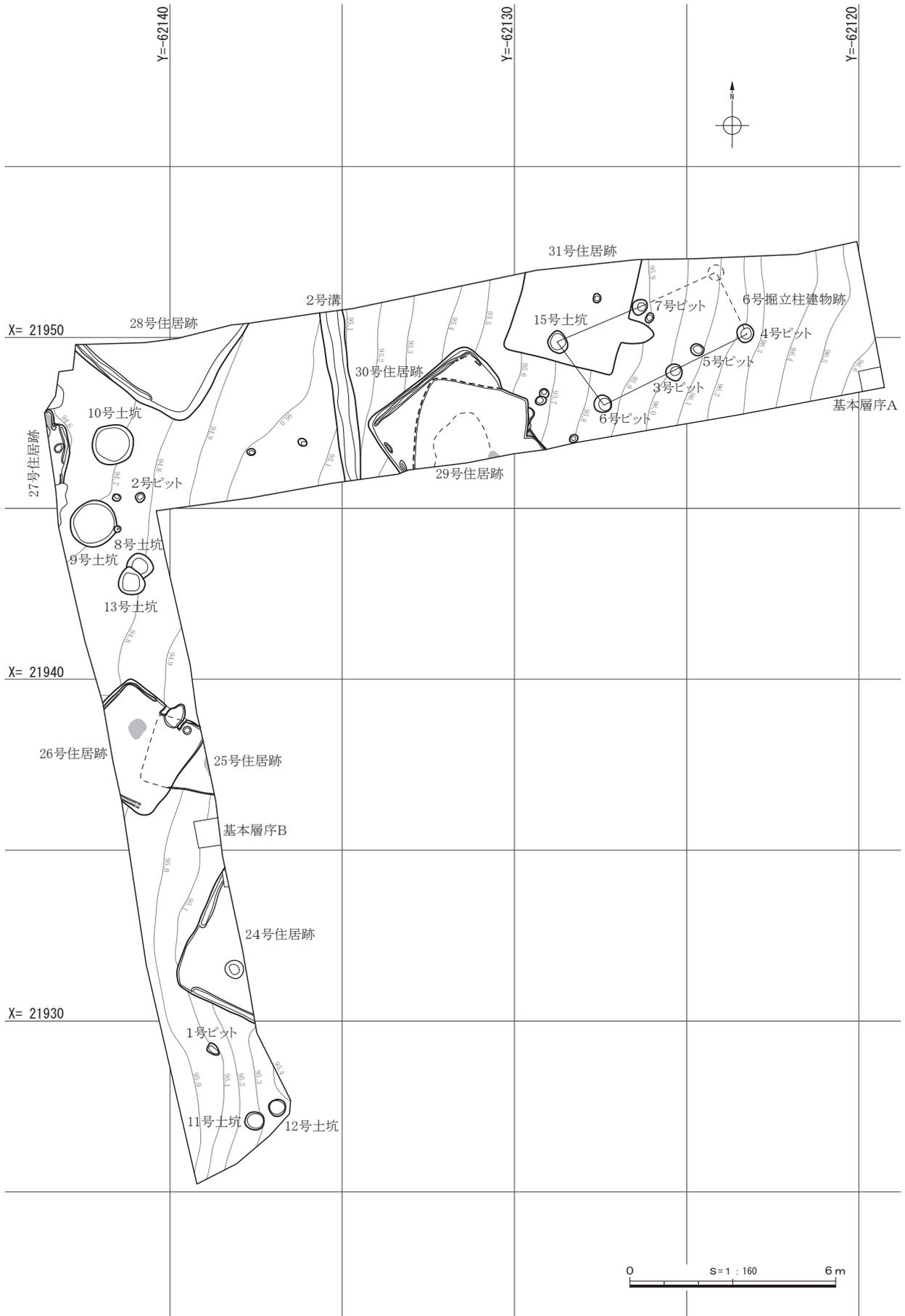
整理作業は、平成23年9月2日から実施し、平成24年3月9日付けで報告書を刊行した。出土遺物の注記作業はインクジェットプリンタ、遺跡略称は「53-040 C」である。遺物の接合にはセメダインCを使用し、欠損部分はエポキシ系樹脂で補強した。

Ⅳ 基本層序

本遺跡は生野山丘陵西側の裾部近くに位置しており、東から西に向けて緩やかに傾斜する。調査区北東壁および南西壁面にトレンチを設定し、基本層序を確認した。本遺跡では、試掘調査結果にもあるように、調査区の大部分から表土（耕作土）直下からハードローム面が検出される状況であった。本来ならばハードローム層の上にソフトローム層の堆積が考えられるが、これは人為的な攪乱や造成によるものか、あるいは本遺跡が傾斜地であるために流失したのではないかと推測される。



第4図 基本層序



第5図 阿知越遺跡C地点全体図

V 検出された遺構と遺物

1 遺跡の概要

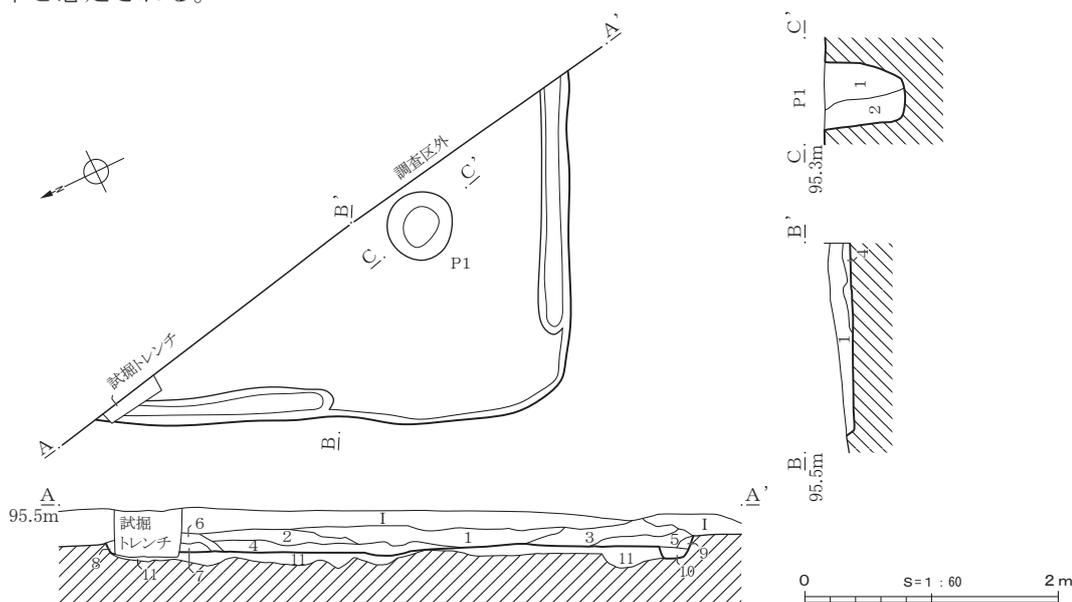
阿知越遺跡C地点は、埼玉県本庄市児玉町入浅見地内の集合住宅建設計画に伴って発掘調査を実施したものである。調査地点は生野山丘陵西側裾部近くの傾斜地に位置する。阿知越遺跡はA・B地点と過去に2回ほど調査が行われており、奈良～平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、および溝跡が検出されている。今回の発掘調査に先立って行われた試掘調査においても、竪穴住居跡と土坑が確認されたことから集落の広がりが想定された。

今回の発掘調査において検出された遺構は、奈良～平安時代の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡1棟、土坑7基、ピット7基と、近世以降の溝跡1条である。2号溝は、覆土中に浅間A軽石が堆積することや規模・形状等がA地点から検出された1号溝と類似するため、両遺構の関連性が推測される。

2 竪穴住居跡

24号住居跡 (SI-24) (第6・7図、表1/写真図版3・11)

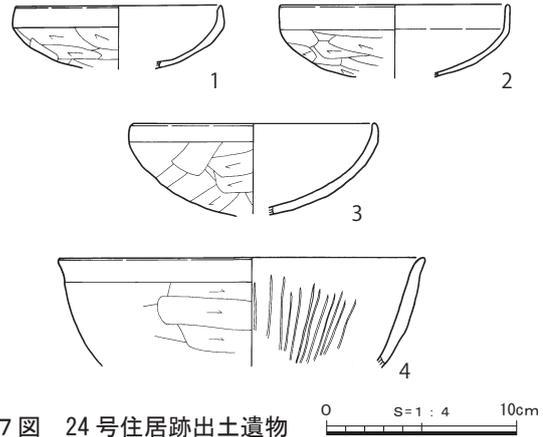
位置 : X=21931 ~ 21935, Y=-62138 ~ -62140。南西側が検出された。**形態・構造** : 平面形態は方形と想定される。主軸方位はN-65°-Wを指す。規模は、残存南北軸3.78m、残存東西軸2.82mを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、現地表面からの残存深度は35cmである。壁溝は南西隅で途切れるものの壁下を巡り、幅13cm、床面からの深さは7cmである。床は、ローム(粒・ブロック)と暗褐色土の混土層(11層)により構築する。ピットは、南西側からP1の1基が検出され、本遺構の柱穴と考えられる。P1の平面形態は円形を呈し、規模は53cm×51cmで、床面からの深さは64cmである。**カマド・貯蔵穴** : 調査区外に位置するものと考えられる。**埋没状態** : 自然堆積である。**遺物** : 覆土中から、土師器(坏・皿・甕・甑)が出土した。皿・甕・甑は1~2個体程度であるのに対し、坏は15個体以上数える。このほか、須恵器の高台付坏が1点出土した。**時期** : 出土遺物の観察から、8世紀前半と想定される。



第6図 24号住居跡

24号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒少量、焼土微量、灰黄色土を中量含む。しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土 ローム粒少量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
3. 黒褐色土 ローム粒・焼土・炭化物少量、ロームブロック（φ 0.5cm）を微量含む。しまり・粘性あり。
4. 暗褐色土 ロームブロック（φ 1.0～3.0cm）多量、ローム粒量、焼土を微量含む。しまり・粘性あり。
5. 黒褐色土 ローム粒中量、焼土少量、ロームブロックを微量含む。しまり・粘性あり。
6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりあり。
7. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.5cm）少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
8. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。
9. 褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 1.0cm）少量、焼土ブロック（φ 0.5～2.0cm）を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
10. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）を中量含む。しまり・粘性あり。
11. 暗褐色土 ローム粒中量、焼土・炭化物・灰黄色粘土ブロック（φ 0.2～1.0cm）を微量含む。しまり・粘性あり。



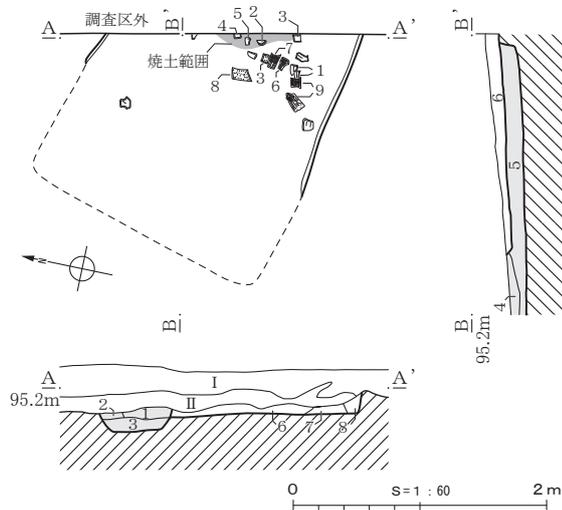
第7図 24号住居跡出土遺物

表1 24号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口径 (10.7)。残存高3.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子・角閃石。E. 内一明赤褐色。外一にぶい褐色。F. 口縁部～体部1/4。H. 覆土。
2	坏	A. 口径 (11.9)。残存高3.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子・黒色粒子。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部～体部1/6。H. 覆土。
3	坏	A. 口径 (12.8)。残存高4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子・角閃石。E. 内外一橙色。F. 口縁部～体部1/6。H. 覆土。
4	坏	A. 口径 (20.1)。残存高5.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ後体部ミガキ。D. チャート・細砂粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部～体部1/8。H. 覆土。

25号住居跡 (SI-25) (第8・9図、表2・3/写真図版3・4・11)

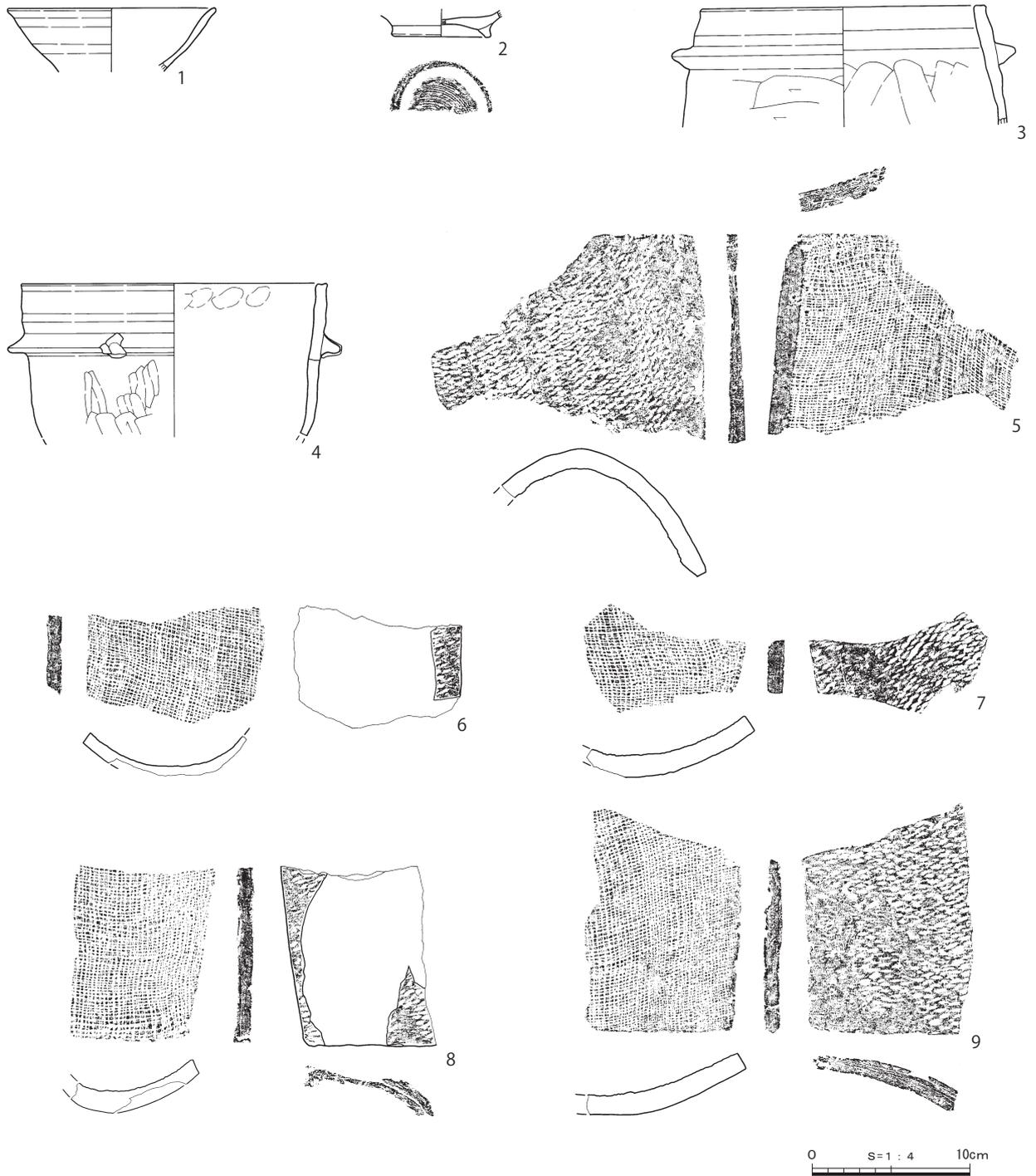
位置：X=21940～21942、Y=-62139～-62141。西側が検出され、東側の大半は調査区外である。西端は26号住居跡との重複により範囲が不明確であったが、堆積土層や出土遺物の観察等から、本遺構の方が新しいと考えられる。形態・構造：平面形態は長方形と想定される。規模は、残存南北軸1.94m、残存東西軸1.28mを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、現地表面からの残存深度は41cm程である。壁溝は検出されなかった。床は、地山のロームを利用している。ピットは検出されなかった。カマド・貯蔵穴：調査区外に位置するものと考えられる。埋没状態：自然堆積である。遺物：南壁下付近の床面直上から焼土・炭化材と共に、土師器片・結晶片岩の他、布目瓦が出土した。布目瓦は粘土が付着しており、被熱していることから、カマドの構築材と考えられる。時期：出土遺物の観察から、10世紀前半と想定される。



25・26号住居跡土層説明

- I. にぶい黄褐色土 客土。汚れたローム粒・軽石粒多量、小礫（φ 1.0～3.0cm）少量、焼土・炭化物・灰黄色粘土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
- II. にぶい黄褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック（φ 0.2～3.0cm）多量、焼土少量、炭化物・軽石を微量含む。しまり・粘性あり。
1. にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～0.8cm）中量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
4. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～3.0cm）多量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
5. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
6. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）多量、焼土・炭化物少量、灰黄色粘土を微量含む。しまり・粘性あり。
7. にぶい赤褐色土 焼土多量、ローム粒・ロームブロック（φ 0.3～1.0cm）・炭化物を中量含む。しまり・粘性弱い。
8. 暗褐色土 ローム粒・焼土少量、ロームブロック（φ 0.2～0.8cm）・炭化物を微量含む。しまりややあり。粘性あり。

第8図 25号住居跡



第9図 25号住居跡出土遺物

表2 25号住居跡出土遺物観察表(1)

1	須恵器 坏	A. 口径(13.0)。残存高4.1。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。D. 白色粒子・褐灰色粒。E. 内外-にぶい黄褐色。G. 酸化焰。F. 口縁部~体部1/3。H. 覆土。
2	須恵器 高台付碗	A. 底径6.3。残存高1.7。B. ロクロ成形、高台部貼り付け。C. 内外面、回転回転ナデ。底部外面右回転糸切り後ナデ。D. 白色粒子・赤褐色粒。E. 内外-にぶい黄褐色。F. 体部下位~底部(1/2)。G. 酸化焰。H. 覆土。
3	羽釜	A. 口径(19.3)。残存高9.7。B. ロクロ成形。C. 外面、口縁部~胴部上位回転ナデ後胴部上位ヘラケズリ・ナデ。内面、口縁部~胴部上位回転ナデ、指頭圧痕。D. 白色粒・赤褐色粒。E. 内-橙色。外-明赤褐色。F. 口縁部~胴部上位1/10。G. 酸化焰。H. 覆土。
4	羽釜	A. 口径(17.9)。残存高7.6。B. ロクロ成形。C. 外面、口縁部~胴部上位回転ナデ後胴部上位ヘラケズリ。内面、口縁部~胴部上位回転ナデ後胴部上位ナデ。D. 黒色粒・赤褐色粒。E. 内-黄褐色。外-暗灰黄色。F. 口縁部(1/6)~胴部上位片。G. 酸化焰気味。H. 覆土。

表3 25号住居跡出土遺物観察表(2)

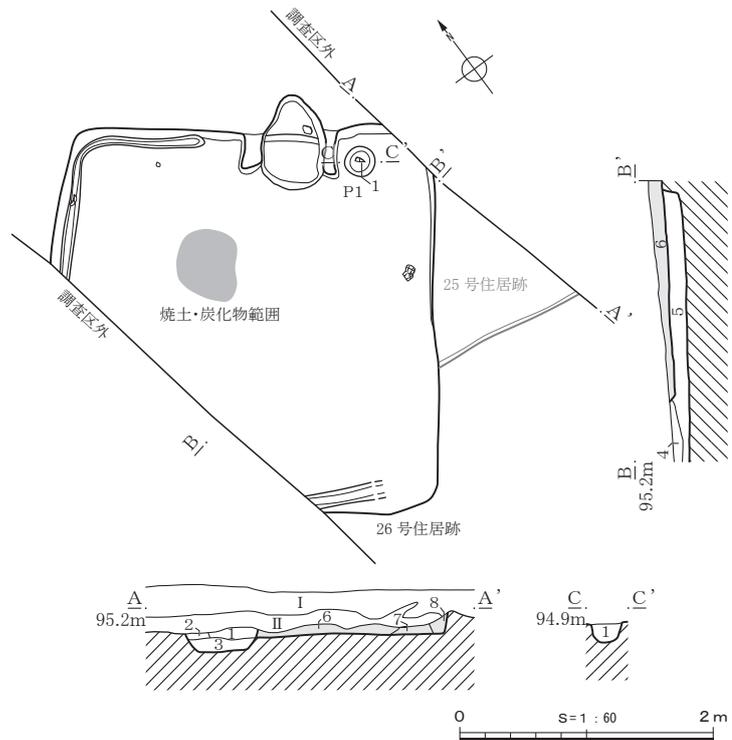
5	丸瓦	A. 残存長13.1。残存幅13.1。厚さ1.2。C. 凸面、縄叩き後ナデ。凹面、布目圧痕。端部面取り。側面、ヘラナデ。狭端面、ヘラナデ。D. 白色粒子・粗礫(φ2.5)。E. 内外一褐色。F. 狭端面右側。G. 酸化焙気味。2次焼成受ける。凹凸面粘土付着。H. 床上。
6	平瓦	A. 残存長7.1。残存幅10.4。厚さ0.8。C. 凹面、布目圧痕。凸面、縄叩き。側面、ヘラナデ。D. 白色粒子・チャート。E. 内一黄灰色。外一にぶい黄褐色。F. 左側か。G. 酸化焙気味。2次焼成受ける。凹面粘土付着。H. 床上。
7	平瓦	A. 残存長6.0。残存幅10.7。厚さ1.4。C. 凹面、布目圧痕。凸面、縄叩き後ナデ。側面、ヘラナデ。D. 白色粒子・チャート。E. 内外一灰色。F. 右側か。G. 還元焰。2次焼成受ける。凹凸面粘土付着。H. 床上。
8	平瓦	A. 残存長6.0。残存幅10.7。厚さ1.4。C. 凹面、布目圧痕。凸面、縄叩き後ナデ。側面、ヘラナデ。D. 白色粒子・チャート。E. 内外一灰色。F. 右側か。G. 還元焰。2次焼成受ける。凹凸面粘土付着。H. 床上。
9	平瓦	A. 残存長14.7。残存幅10.1。厚さ1.4。C. 凹面、布目圧痕。凸面、縄叩き後ナデ。側面、ヘラナデ。狭端部ヘラナデ。D. 赤色粒。E. 内外一橙色。F. 狭端部右側。G. 酸化焰。H. 床上。
10	石	A. 残存長17.2。残存幅10.0。厚さ4.6。重さ1050。D. 片岩。H. 覆土。

26号住居跡(SI-26)(第10~12図、表4/写真図版3・4・11)

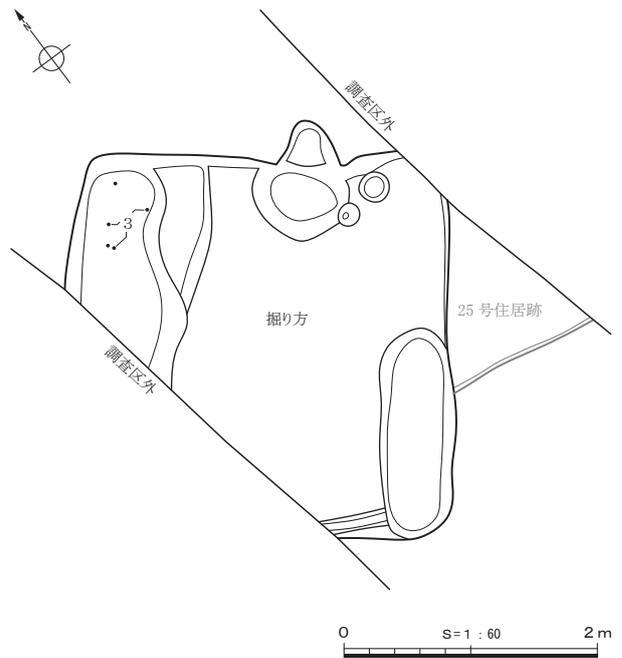
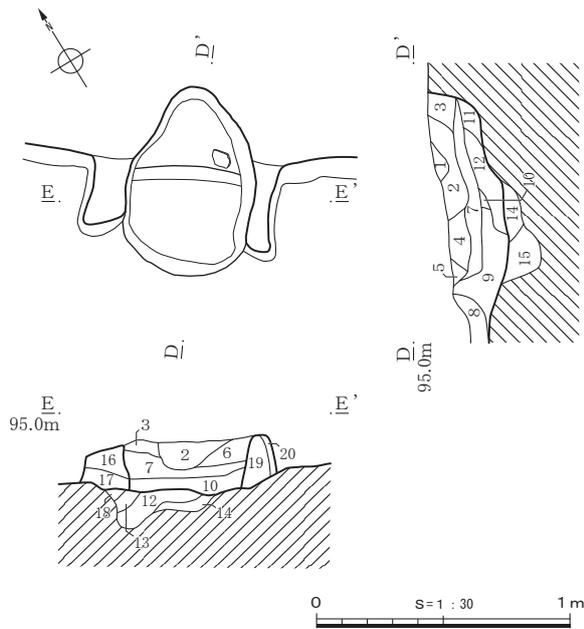
位置: X=21937~21939, Y=-62140~-62142。北東端および南西側は調査区外である。SI-25と重複するが、出土遺物等の観察から本遺構の方が古いと考えられる。形態・構造: 平面形態は長方形である。主軸方位はN-38°-Eを指す。規模は、南北軸3.01m、東西軸3.02mを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの残存深度は25cmである。壁溝は南から西側の壁下から検出され、幅4~10cm、床面からの深さは3~8cmである。床は、地山のロームを利用している。ピットはカマドの右袖脇からP1の1基が検出された。規模は23×23cmで、床面からの深さは13cmである。カマド: 東壁やや南寄りに付設される。全長75cm、最大幅77cmを測る。燃焼部は床面より低く、奥壁は急に立ち上がる。掘り方において、両袖端部付近から芯材痕と思われるピットが検出された。埋没状態: 自然堆積である。遺物: 覆土中から、少量の土師器(坏・鉢・甕)・須恵器(甕)、鉄製品(釘)1点、片岩1点が出土した。この他、土師器の高台付壊片が2片ほど出土したが、これは25号住居跡に帰属するものと考えられる。時期: 出土遺物の観察から、7世紀後半と想定される。

25・26号住居跡土層説明

- I. にぶい黄褐色土 客土。汚れたローム粒・軽石粒多量、小礫(φ1.0~3.0cm)少量、焼土・炭化物・灰黄色粘土を微量含む。しまり・粘性ややあり。
- II. にぶい黄褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック(φ0.2~3.0cm)大量、焼土少量、炭化物・軽石を微量含む。しまり・粘性あり。
1. にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~0.8cm)中量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~2.0cm)多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
4. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~3.0cm)多量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
5. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~2.0cm)多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
6. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~1.0cm)多量、焼土・炭化物少量、灰黄色粘土を微量含む。しまり・粘性あり。
7. にぶい赤褐色土 焼土多量、ローム粒・ロームブロック(φ0.3~1.0cm)・炭化物を中量含む。しまり・粘性弱い。
8. 暗褐色土 ローム粒・焼土少量、ロームブロック(φ0.2~0.8cm)・炭化物を微量含む。しまりややあり。粘性あり。



第10図 26号住居跡(1)



26号住居跡P1土層説明

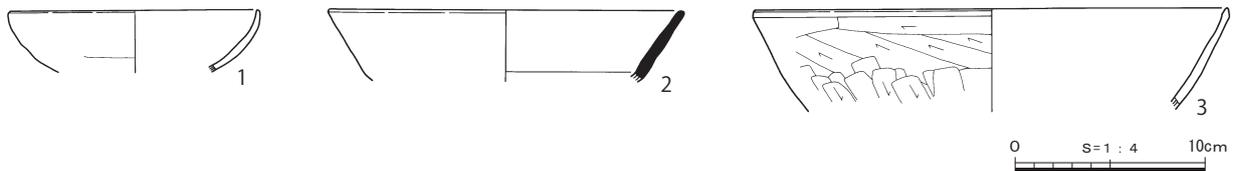
1. 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (φ 0.2~0.8cm) 少量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。

26号住居跡カマド土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒・焼土を少量含む。しまり・粘性あり。
2. にぶい黄褐色土 焼土粒・焼土ブロック (φ 0.2~2.0cm) 多量、ロームブロック中量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
3. 黒褐色土 ローム粒・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
4. 褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~1.0cm) 大量、焼土少量、炭化物・白色粒を微量含む。しまりややあり。粘性あり。
5. 黒褐色土 焼土・焼土ブロック (φ 0.2~2.0cm) ・ローム粒多量、ロームブロック (φ 0.2~0.5cm) 少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
6. 赤褐色土 焼土多量、ローム粒・炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
7. 黒褐色土 焼土・炭化物多量、ローム粒中量、灰を少量含む。しまり・粘性ややあり。
8. 褐色土 灰黄色粘土粒・灰黄色粘土ブロック (φ 0.2~0.5cm) 中量、焼土・炭化物を少量含む。しまり・粘性あり。
9. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~0.8cm) ・炭化物・炭化材・焼土を多量含む。しまり・粘性ややあり。

10. 黄褐色土 ローム主体に、暗褐色土を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
11. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~2.0cm) 多量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
12. 暗褐色土 焼土・炭化物多量、ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~2.0cm) を中量含む。しまりややあり。粘性あり。
13. 褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~1.0cm) 多量、焼土中量、炭化物を少量含む。しまり・粘性あり。
14. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~0.8cm) を中量含む。しまりややあり。粘性あり。
15. 褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~1.0cm) 大量、焼土・炭化物を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
16. にぶい黄褐色 灰黄色粘土を主体とする。ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~0.8cm) ・黄褐色粒少量、焼土を微量含む。しまり・粘性強い。
17. 黒褐色土 焼土中量、ローム粒・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
18. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~1.0cm) 多量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
19. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2~1.0cm) 多量、焼土少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
20. 明黄褐色土 ロームを主体とする。しまり・粘性あり。

第11図 26号住居跡(2)



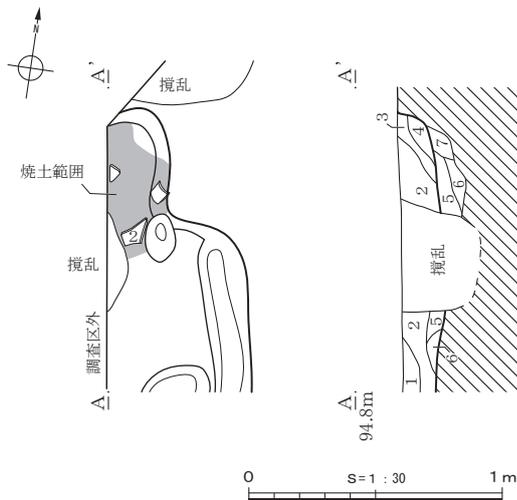
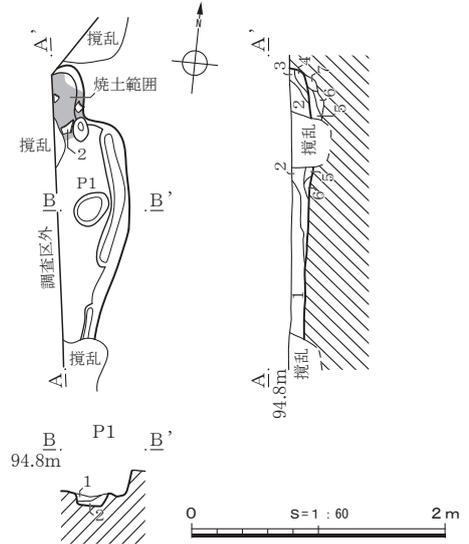
第12図 26号住居跡出土遺物

表4 26号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口径 (13.2)。残存高 3.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 黒色粒子・細砂粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部~体部 1/5。G. 外面体部器面荒れ、剥落。H. 覆土。
2	須恵器 坏	A. 口径 (18.8)。残存高 3.7。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。D. 白色粒子・石英。E. 内外一灰色。F. 口縁部~体部 1/8。G. 還元焰。H. 床下。
3	坏	A. 口径 (24.8)。残存高 5.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子・チャート。E. 内一橙色。外一灰黄褐色。F. 口縁部~体部 1/8。H. 床下。
4	石	A. 残存長 10.0。残存幅 5.2。厚さ 1.6。重さ 140。D. 片岩。H. 覆土。

27号住居跡 (SI-27) (第13・14図、表5 / 写真図版5・11)

位置 : X=21942 ~ 21944, Y=-62143 ~ -62144。東端が検出され、西側の大半は調査区外である。北・南側は攪乱を受ける。形態 : 平面形態は(長)方形基調と想定される。規模は、残存南北軸 2.11 m、残存東西軸 0.64 mを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの残存深度は 13 cmである。壁溝は途切れるものの、東壁下から検出され、幅 4 ~ 8 cm、床面からの深さは 5 ~ 8 cmである。床は、地山のロームを利用している。ピットは P1 の 1 基が検出され、規模は 30 × 22 cm、床面からの深さは 10 cmを測る。カマド : 北壁の東寄りに付設される。遺存長 42 cm、遺存幅 25 cmを測る。燃烧部は床面よりやや傾斜し、奥壁は急に立ち上がる。攪乱の影響により、遺存状態は不良である。埋没状態 : 自然堆積である。遺物 : カマドの崩落土内から、土師器の高台付碗(1)と甕片が出土した。この他、覆土中から出土した遺物は土師器の甕片が少量である。時期 : 10 世紀前半と想定される。



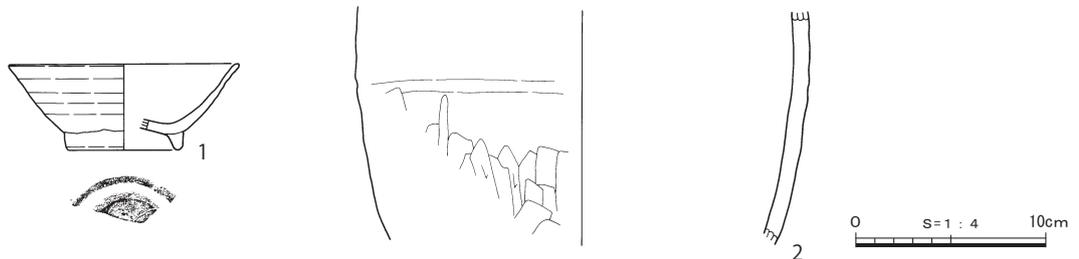
27号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 1.0cm)・焼土を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土 焼土中量、ローム粒を少量含む。しまりあり。粘性やや強い。
3. 暗褐色土 焼土を中量含む。しまりあり。粘性やや強い。
4. 暗褐色土 焼土多量、炭化物を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
5. 暗褐色土 焼土ブロック(φ 0.5cm)を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
6. 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。しまりあり。粘性強い。
7. にぶい赤褐色土 焼土多量、ローム粒を微量含む。しまり弱い。粘性ややあり。
8. 黒褐色土 ローム粒少量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性ややあり。
9. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~0.5cm)少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。

27号住居跡カマド土層説明

1. 褐色土 炭化物を微量含む。しまり弱い。粘性強い。
2. 明黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とする。しまり弱い。粘性強い。

第13図 27号住居跡



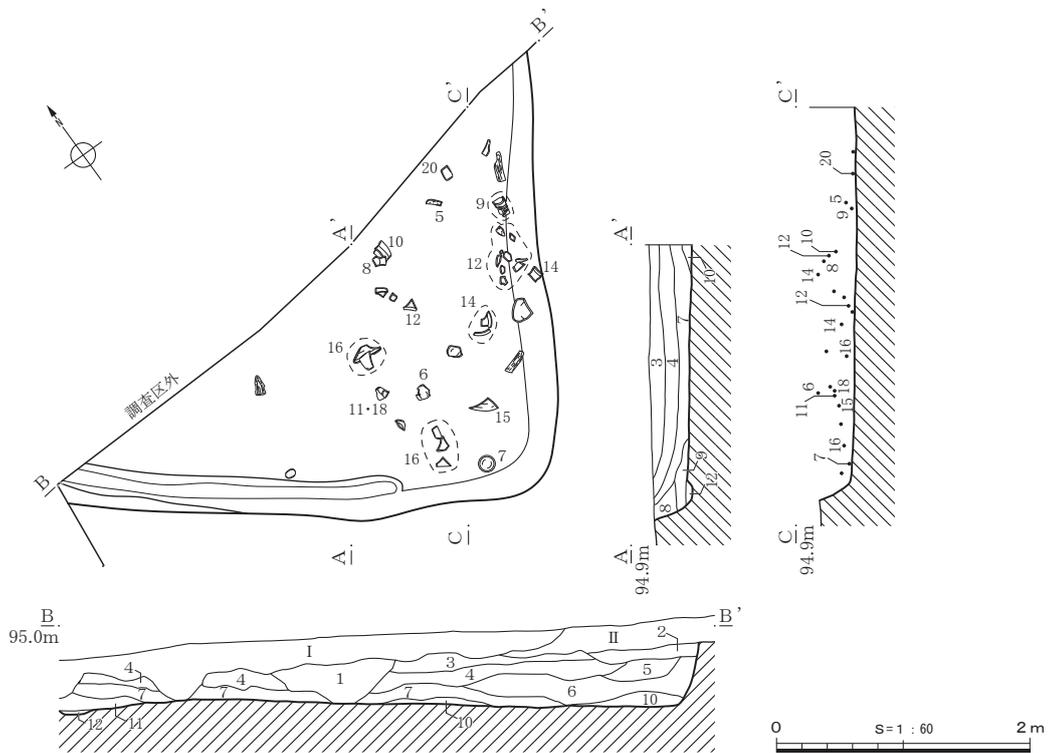
第14図 27号住居跡出土遺物

表5 27号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 高台付碗	A. 口径(12.1)。底径(5.8)。器高4.6。B. ロクロ成形、高台部貼り付け。C. 内外面、回転ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒子・赤褐色粒。E. 内外一橙色。F. 1/6。H. カマド。
2	羽釜	A. 残存高12.2。B. ロクロ成形。C. 外面、胴部回転ナデ後ヘラケズリ。内面、胴部回転ナデ。D. 白色粒子・片岩。E. 内-にぶい黄褐色。外-にぶい黄橙色。F. 胴部片。G. 酸化焰。H. 覆土。

28号住居跡 (SI-28) (第15～17図、表6・7 / 写真図版5・6・12)

位置：X=21948～21951、Y=-62138～-62143。南東側が検出され、北西側は調査区外である。形態・構造：平面形態は方形と想定される。主軸方位はN-35°-Eを指す。規模は、残存南北軸3.70m、残存東西軸3.94mを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、現地表面からの残存深度は70cmである。壁溝は南壁下から検出され、幅8～11cm、床面からの深さは5～8cmである。床は、地山のロームを利用している。ピットは検出されなかった。カマド：調査区外と考えられる。埋没状態：調査区北壁の土層観察をしたところ、検出された範囲の東半側では一度自然埋没をした後、覆土中層にロームブロックを多量に含む覆土(6層)が人為的に堆積している状態が確認された。その後は再び自然堆積をし、表土層下からは後世による土坑状・ピット状の掘り込みが確認された。遺物：主に東半側の人為的な覆土(6層)から、土師器(坏・甕)や須恵器(坏・大甕)などが出土した。覆土下層～床面直上からの出土はほとんどないため、本遺構の覆土内から出土した遺物は人為的に投棄された可能性が考えられる。時期：出土遺物は9世紀後半に帰属するため、本遺構は同時期か、あるいはこれより古い可能性が考えられる。

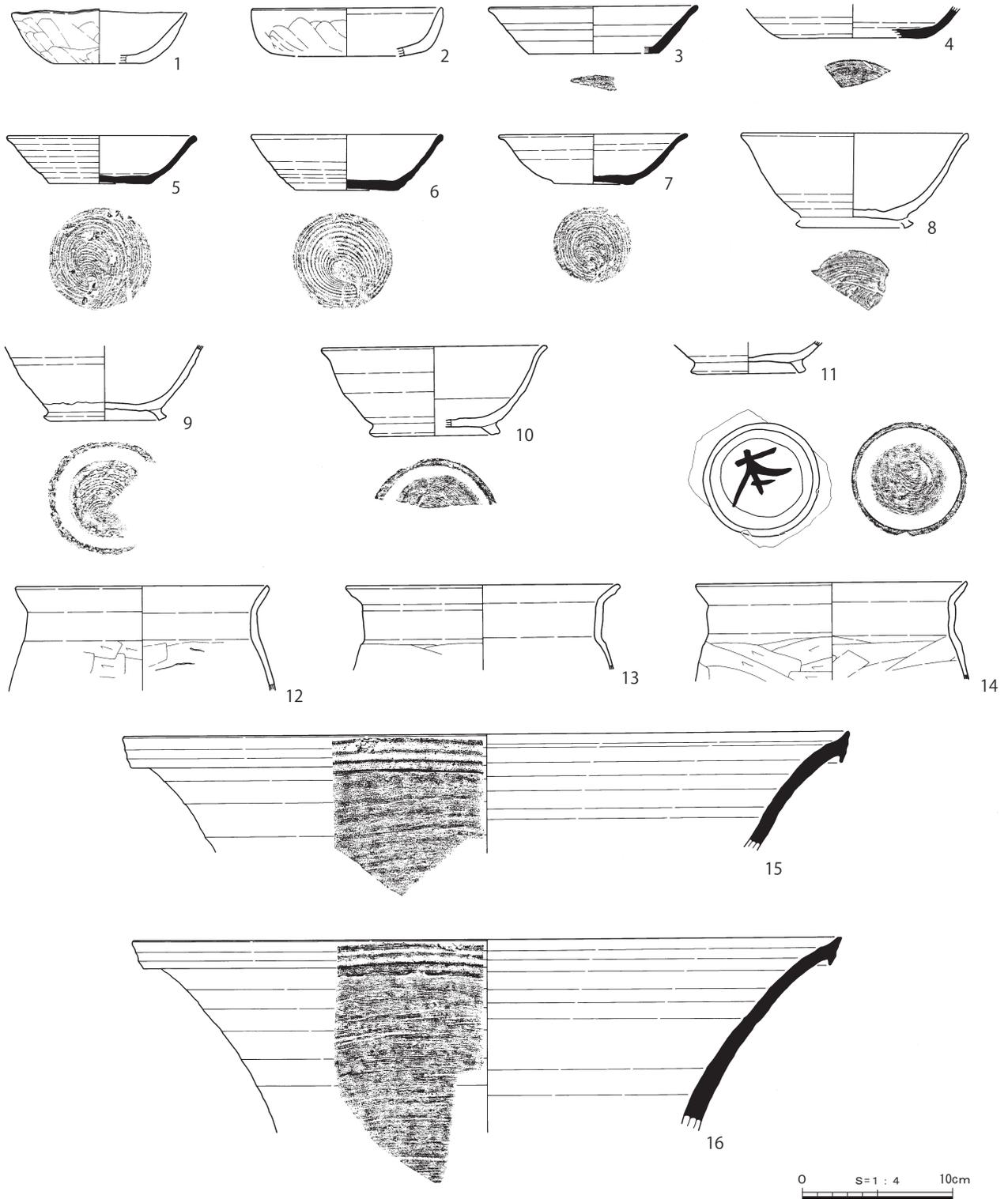


第15図 28号住居跡

28号住居跡土層説明

- I. 灰黄褐色土 攪乱層。ローム粒・ロームブロック(φ0.2～3.0cm)・焼土・炭化物・粘土とともに多量の瓦礫を含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。
- II. にぶい黄褐色土 汚れたロームブロック(φ0.2～3.0cm)大量、焼土・炭化物中量、白色粒・小礫(φ1.0～2.0cm)を微量含む。しまり・粘性ややあり。
1. 黒褐色土 ローム粒大量、ロームブロック(φ0.2～1.0cm)多量、炭化物中量、焼土少量、白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
 2. 黒褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック(φ0.2～2.0cm)中量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
 3. 暗褐色土 ローム粒中量、ロームブロック(φ0.2～0.5cm)・焼土少量、炭化物・灰黄色粘土を微量含む。しまりあり。粘性あり。
 4. 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(φ0.2～0.8cm)少量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。

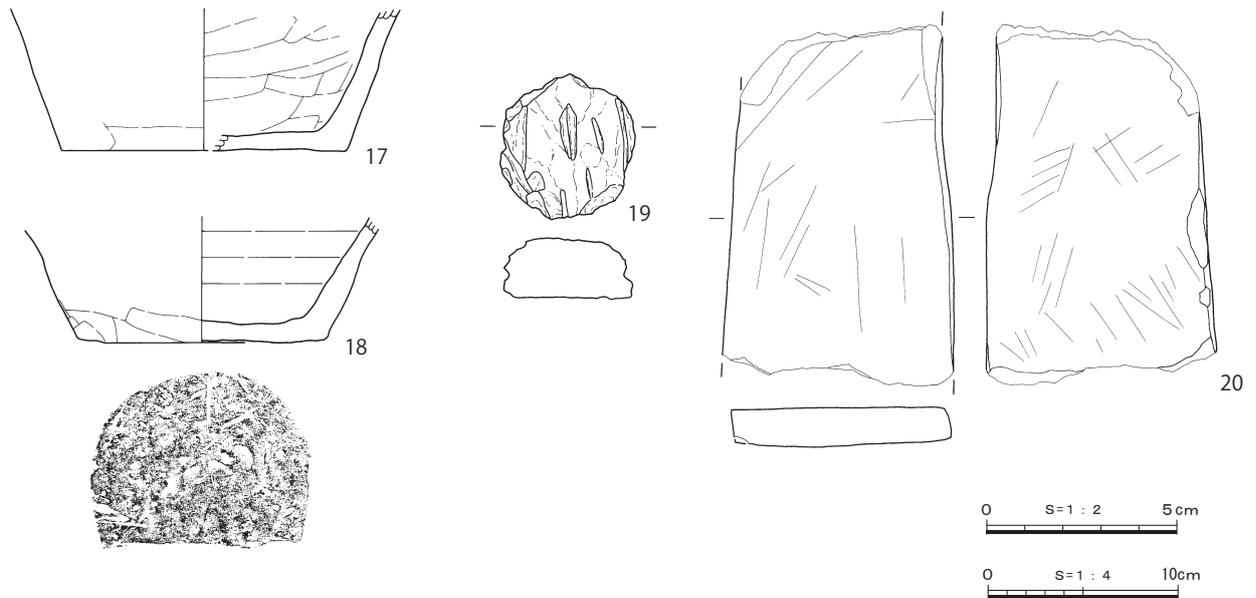
5. 暗褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック(φ0.2～2.0cm)中量、ロームブロック(φ0.2～2.0cm)・焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
6. 褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2～5.0cm)多量、焼土少量、炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
7. 暗褐色土 ローム粒中量、ロームブロック(φ0.2～1.0cm)少量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
8. にぶい黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(φ0.2～1.0cm)中量、焼土を微量含む。しまり・粘性あり。
9. 褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2～3.0cm)を多量含む。しまり・粘性あり。
10. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2～2.0cm)・焼土少量、炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
11. 褐色土 ロームブロック(φ0.2～3.0cm)多量、ローム粒中量、白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
12. 褐色土 ローム粒を大量含む。しまりややあり。粘性あり。



第16図 28号住居跡出土遺物(1)

表6 28号住居跡出土遺物観察表(1)

1	坏	A. 口径(11.6)。底径(6.1)。器高3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部～体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子。E. 内外-橙色。F. 1/3。H. 覆土。
2	坏	A. 口径(12.6)。残存高3.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ。内面、ヨコナデ。D. 黒色粒子。E. 内外-にぶい褐色。F. 1/6。H. 覆土。
3	須恵器 坏	A. 口径(13.9)。底径(8.6)。器高3.1。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り。D. 白色針状物質・白色粒子。E. 内外-灰黄色。F. 1/8。G. 還元焰。H. 覆土。
4	須恵器 坏	A. 底径(9.4)。残存高2.1。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り。D. 白色針状物質・白色粒子。E. 内外-灰白色。F. 体部下半～底部1/6。G. 還元焰。H. 覆土。



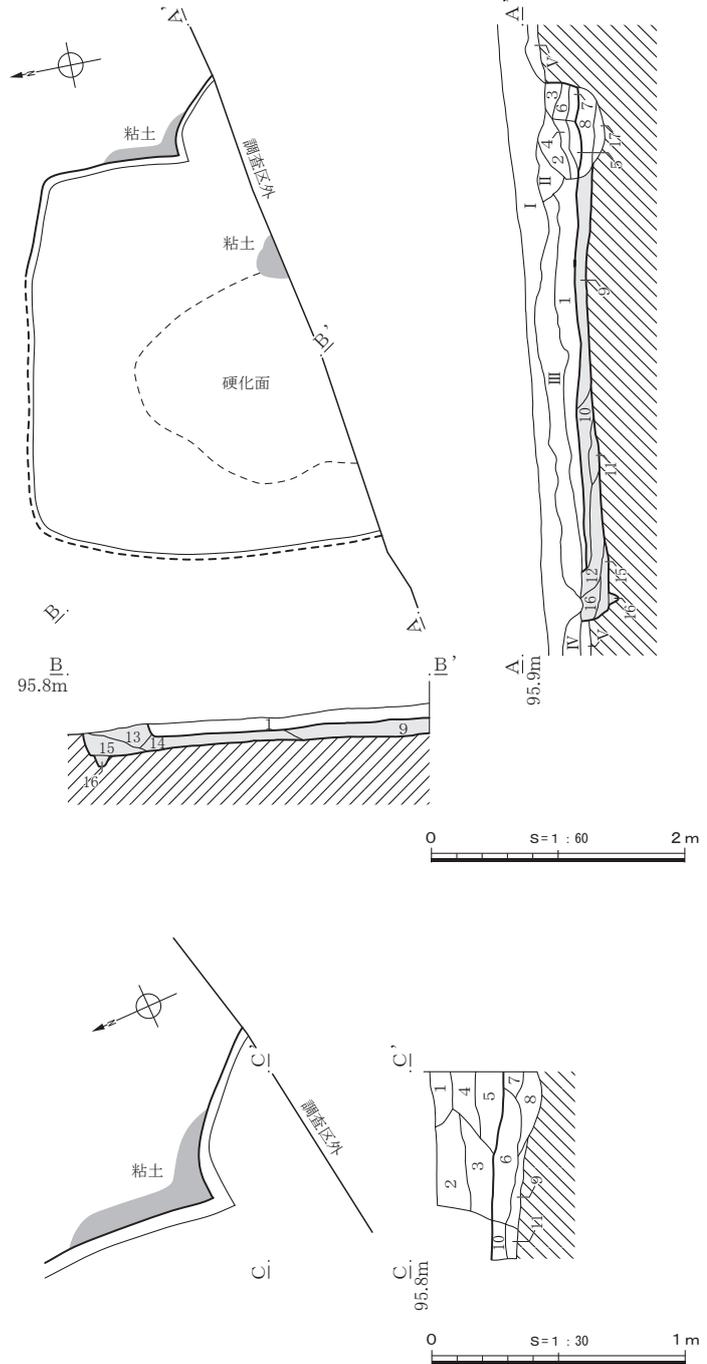
第 17 図 28 号住居跡出土遺物 (2)

表 7 28 号住居跡出土遺物観察表 (2)

5	須恵器 坏	A. 口径 (12.0)。底径 6.8。器高 4.2。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り。D. 白色粒子・石英。E. 内外-灰色。F. 1/3。G. 還元焰。H. 覆土。
6	須恵器 坏	A. 口径 (12.3)。底径 6.4。器高 3.7。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り。D. 白色粒子・白色石。E. 内外-灰色。F. 1/3。G. 還元焰。H. 覆土。
7	須恵器 坏	A. 口径 12.5。底径 5.2。器高 3.4。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り。D. 白色粒子・白色石。E. 内外-灰色。F. 完形。G. 還元焰。H. 覆土。
8	須恵器 高台付坑	A. 口径 (15.1)。残存高 5.7。B. ロクロ成形、高台部貼り付け。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り後ナデ。D. 褐色粒。E. 内外-灰色。F. 1/6。G. 酸化焰。H. 覆土。
9	須恵器 高台付坑	A. 口径 8.1。残存高 5.0。B. ロクロ成形、高台部貼り付け。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り後ナデ。D. 白色石・褐色粒。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 1/5。G. 酸化焰。H. 覆土。
10	須恵器 高台付坑	A. 口径 (15.0)。底径 (8.6)。器高 (6.0)。B. ロクロ成形、高台付貼り付け。C. 内外面回転ナデ。底部外面右回転糸切り後ナデ。D. 白色粒・褐色粒。E. 内外-にぶい黄橙色。F. 1/2。G. 酸化焰。H. 覆土。
11	須恵器 高台付坑	A. 口径 7.7。残存高 2.1。B. ロクロ成形、高台部貼り付け。C. 内外面、回転ナデ。底部外面右回転糸切り後ナデ。D. 白色粒子。E. 内外-灰黄色。F. 体部下位~底部完形。G. 酸化焰気味。外面底部墨書「本」あり。H. 覆土。
12	甕	A. 口径 (16.8)。残存高 7.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒子・細砂粒。E. 内外-橙色。F. 口縁部~胴部上位 1/6。H. 覆土。
13	甕	A. 口径 (18.0)。残存高 5.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 片岩・白色粒子。E. 内-明赤褐色。外-にぶい褐色。F. 口縁部~胴部上位 1/6。H. 覆土。
14	甕	A. 口径 (18.0)。残存高 7.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 黒色粒子・細砂粒。E. 内外-橙色。F. 口縁部~胴部上位 1/4。H. 覆土。
15	須恵器 甕	A. 口径 (48.4)。残存高 7.9。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。D. 白色石・白色粒子。E. 内外-灰色。F. 口縁部 1/8。G. 還元焰。H. 覆土。
16	須恵器 甕	A. 口径 (47.2)。残存高 13.0。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。D. 白色石・白色粒子。E. 内外-灰色。F. 口縁部 1/8。G. 還元焰。H. 覆土。
17	須恵器 甕	A. 口径 (15.0)。残存高 7.4。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部摩滅し不明瞭。D. 黒色粒子。E. 内-浅黄色。外-にぶい黄橙色。F. 胴部下位~底部 1/5。G. 酸化焰気味。H. 覆土。
18	須恵器 甕	A. 口径 (13.1)。残存高 6.6。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ・底部ナデ。D. 白色粒子。E. 内外-灰色。F. 胴部下位~底部 1/3。G. 酸化焰気味。H. 覆土。
19	粘土塊	A. 長さ 3.8。幅 3.4。厚さ 1.6。重さ 16.8。C. ナデ。D. 白色粒子・粗礫。E. 内外-橙色。F. 完形。H. 覆土。
20	砥石	A. 残存長 9.5。幅 6.1。厚さ 3.7。重さ 104.84。D. 凝灰岩。F. 上・下端部欠損。G. 4面使用。表裏面の砥面には擦痕が認められる。H. 覆土。
21	石	A. 残存長 29.5。残存幅 7.4。厚さ 4.9。重さ 1310。D. 片岩。H. 覆土。

29号住居跡 (SI-29) (第18・19図、表8 / 写真図版6・7・12)

位置：X=21947～21949、Y=-62130～-62133。北半側が検出され、南側は調査区外である。30号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。形態・構造：平面形態は方形と想定される。主軸方位はN-78°-Wを指す。規模は、残存南北軸2.8m、残存東西軸3.16mを測る。壁は傾斜して立ち上がり、現地表面からの深さは48cmである。床は、ローム粒・ロームブロック・暗褐色土の混土による貼床が、厚さ6～18cmで施されている。なお、本遺構は30号住居跡を壊して構築しているため、カマド前面から中央部の貼床にはカマドの構築材である灰白粘土や焼土、炭化材が多量に含まれていた(15層)。カマド：東壁のやや南寄りに付設される。残存長75cm、幅(55)cmで、燃烧部の掘り方は床面から18cm程掘り込まれている。カマドから左脇の壁面には、粘土が貼り付けられていた。埋没状態：自然堆積である。遺物：カマド内から、土師器の台付甕(1)が出土した。この他、覆土中からは、土師器(坏・甕)、須恵器(蓋・甕)、須恵質の羽釜、石製品(2)、片岩、鉄滓などが少量出土した。時期：9世紀初頭と想定される。



第18図 29号住居跡

29号住居跡土層説明(1)

- I. 黒褐色土 石灰状の白色粒(φ0.2～0.8cm)多量。明黄褐色粒(φ0.2～0.5cm)・ロームブロック(φ0.2～2.0cm)・ローム粒・焼土・炭化物・小礫(φ0.5～2.0)cm中量。しまり・粘性ややあり。
- II. 灰黄褐色土 汚れたロームブロック(φ0.2～3.0cm)多量。ロームブロック(φ0.2～1.0cm)・焼土中量。炭化物少量。小礫(φ1.0～2.0cm)・白色粒微量。
- III. 暗褐色土 汚れたロームブロック(φ0.2～3.0cm)・ローム粒多量。焼土・炭化物・白色粒(軽石)微量。しまりあり。粘性あり。
- IV. にぶい黄褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック(φ0.2～2.0cm)多量。焼土・炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
- V. 褐色土 ロームと暗褐色土の混土層。しまりあり。粘性あり。
1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2～2.0cm)・焼土少量。炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
2. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ0.2～2.0cm)・炭化物・炭化材多量。ローム粒・ロームブロック(φ0.2～2.0cm)・焼土少量。しまりややあり。粘性あり。

3. 黒褐色土 ローム粒少量。炭化物微量。しまり・粘性ややあり。
4. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ0.2～0.8cm)多量。ローム粒・ロームブロック(φ0.2～1.0cm)中量。焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
5. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ0.2～3.0cm)・ローム粒・ロームブロック(φ0.2～1.0cm)多量。焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
6. 暗褐色土 ローム粒少量。焼土・炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
7. 黒褐色土 ローム粒少量。炭化物・炭化材多量。焼土微量。しまり・粘性ややあり。
8. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ0.2～5.0cm)多量。ローム粒中量。ロームブロック(φ0.2～0.8cm)・焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
9. 灰黄褐色土 粘土ブロック(φ0.2～5.0cm)多量。ローム粒・ロームブロック(φ0.2～0.7cm)・焼土・炭化物多量。しまり・粘性やや強い。カマド崩落土。
10. 灰黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ0.2～1.0cm)中量。焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。

29号住居跡土層説明(2)

- 10. 灰黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ 0.2~1.0cm)中量。焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
- 11. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~0.8cm)中量。粘土粒・焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
- 12. 黒褐色土 ローム粒中量。ロームブロック(φ 0.2~1.0cm)少量。炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
- 13. 暗褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ 0.2~2.0cm)・白色粉・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
- 14. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~1.0cm)中量。焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
- 15. 黒褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ 0.2~2.0cm)中量。粘土ブロック(φ 0.2~1.0cm)・焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
- 16. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~1.0cm)多量。焼土・炭化物微量。しまりややあり。粘性あり。
- 17. 黒褐色土 ローム粒多量。粘土粒・粘土ブロック(φ 0.2~3.0cm)・焼土中量。炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
- 2. にぶい黄褐色土 粘土ブロック(φ 0.2~5.0cm)多量。焼土・炭化物中量。ロームブロック少量。白色粒微量。
- 3. 灰黄褐色土 粘土ブロック(φ 0.2~5.0cm)多量。焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
- 4. 黒褐色土 ローム粒少量。焼土・炭化物・粘土粒微量。しまりあり。粘性あり。
- 5. 黒褐色土 炭化物中量。ローム粒少量。焼土・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
- 6. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ 0.2~5.0cm)大量。ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~0.5cm)中量。焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性やや強い。
- 7. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~0.5cm)少量。炭化物微量。しまりやや弱い。粘性あり。
- 8. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~1.0cm)中量。しまりややあり。粘性あり。
- 9. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~2.0cm)多量。しまりややあり。粘性あり。
- 10. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ 0.2~5.0cm)多量。ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~1.5cm)少量。炭化物微量。しまり・粘性やや強い。
- 11. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~1.0cm)中量。焼土・炭化物微量。しまりややあり。粘性あり。

29号住居跡カマド土層説明

- 1. にぶい黄褐色土 汚れたロームブロック(φ 0.2~3.0cm)多量。炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。



第 19 図 29号住居跡出土遺物

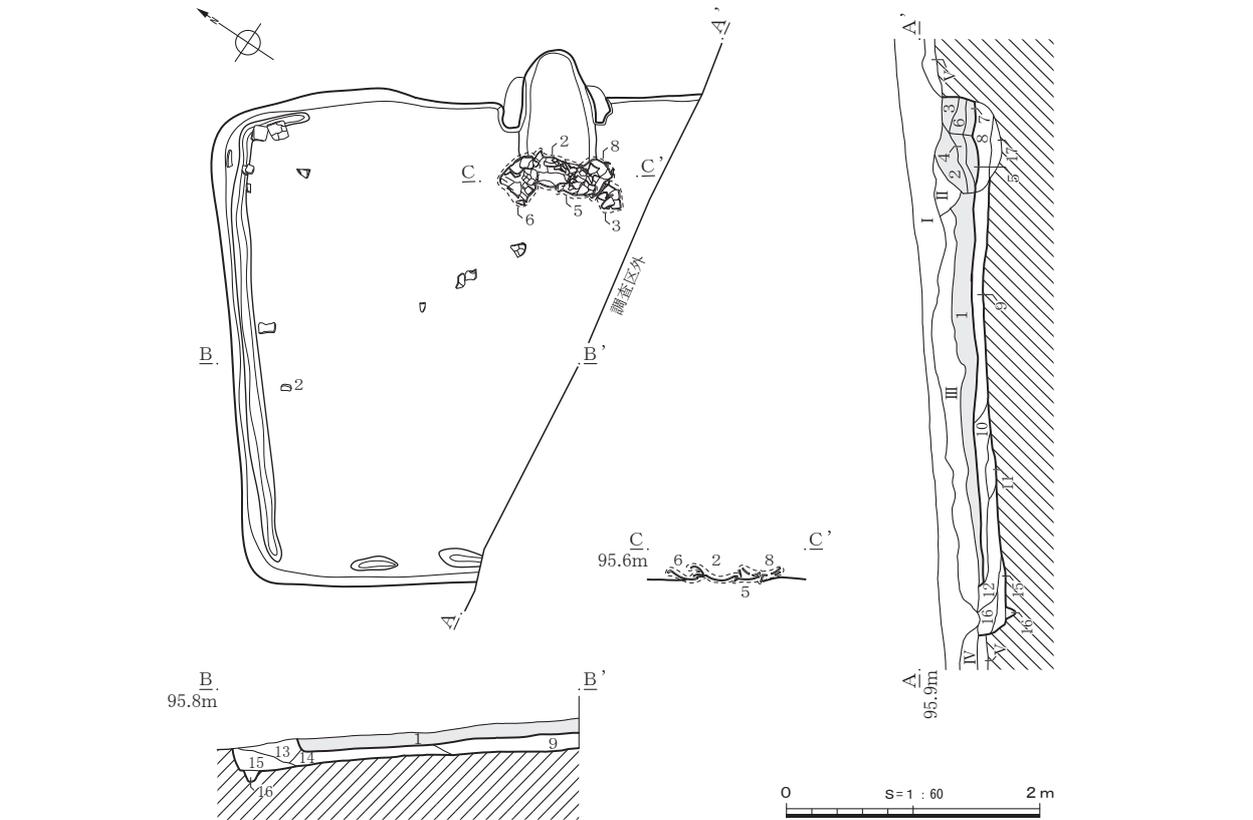
表 8 29号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口径(14.4)。残存高8.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒子・細砂粒。E. 内一明黄褐色。外一橙色。F. 口縁部~胴部上位1/8。H. 覆土。
2	砥石	A. 残存長9.5。幅6.0。厚さ3.9。重さ224.40。D. 凝灰岩。F. 上・下端部欠損。G. 4面使用。被熱により砥面の大半に破砕痕が認められ、上・下端部は欠損している。H. 覆土。

30号住居跡(SI-30)(第20・21図、表9/写真図版7・8・13)

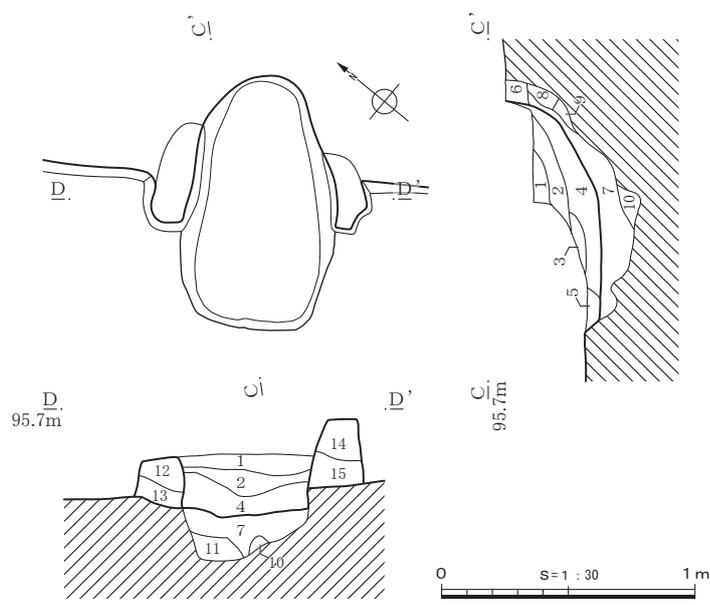
位置：X=21947~21950、Y=-62130~-62135。北側が検出され、南側は調査区外である。29号住居跡が本遺構の上に構築されていた。形態・構造：平面形態は方形と想定される。主軸方位はN-52°-Eを指す。規模は、残存南北軸3.9m、東西軸3.95mを測る。壁は傾斜して立ち上がり、現地表面からの深さは60cmである。壁溝は途切れるものの、北壁~西壁下から検出され、幅3~6cm、床面からの深さは4~10cmである。床は、地山のロームを利用している。カマド：東壁の中央寄りに付設される。全長110cm、遺存最大幅88cmを測る。燃烧部は床面から12cm程掘り込まれ、奥壁は傾斜して立ち上がる。焚口部の掘り込み幅は、両袖部端にまで及ぶ。カマド前面の床上から土師器の甕4点(5~8)が、入れ子状に横たわった状態で出土した。両袖部の上に懸架材として使用されてい

たものが、崩落したものと考えられる。埋没状態：カマドの崩落土が住居跡の中央部まで流れ込み、床上に厚く堆積していた。遺物：カマドの懸架材と考えられる土師器の甕の他、覆土中から、土師器（坏・甕・台付甕）、須恵器（甕）の破片が出土した。時期：8世紀後半と想定される。



30号住居跡土層説明（1）

- I. 黒褐色土 石灰状の白色粒（φ 0.2～0.8cm）多量。明黄褐色粒（φ 0.2～0.5cm）・ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）・ローム粒・焼土・炭化物・小礫（φ 0.5～2.0）cm中量。しまり・粘性ややあり。
- II. 灰黄褐色土 汚れたロームブロック（φ 0.2～3.0cm）大量。ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）・焼土中量。炭化物少量。小礫（φ 1.0～2.0cm）・白色粒微量。
- III. 暗褐色土 汚れたロームブロック（φ 0.2～3.0cm）・ローム粒多量。焼土・炭化物・白色粒（軽石）微量。しまりあり。粘性あり。
- IV. にぶい黄褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック（φ 0.2～2.0cm）多量。焼土・炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
- V. 褐色土 ロームと暗褐色土の混土層。しまりあり。粘性あり。
- 1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）・焼土少量。炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
- 2. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック（φ 0.2～2.0cm）・炭化物・炭化材多量。ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）・焼土少量。しまりややあり。粘性あり。
- 3. 黒褐色土 ローム粒少量。炭化物微量。しまり・粘性ややあり。
- 4. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック（φ 0.2～0.8cm）多量。ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）中量。焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
- 5. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック（φ 0.2～3.0cm）・ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）大量。焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
- 6. 暗褐色土 ローム粒少量。焼土・炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。
- 7. 黒褐色土 ローム粒少量。炭化物・炭化材多量。焼土微量。しまり・粘性ややあり。
- 8. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック（φ 0.2～5.0cm）多量。ローム粒中量。ロームブロック（φ 0.2～0.8cm）・焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
- 9. 灰黄褐色土 粘土ブロック（φ 0.2～5.0cm）大量。ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～0.7cm）・焼土・炭化物多量。しまり・粘性やや強い。



第 20 図 30号住居跡

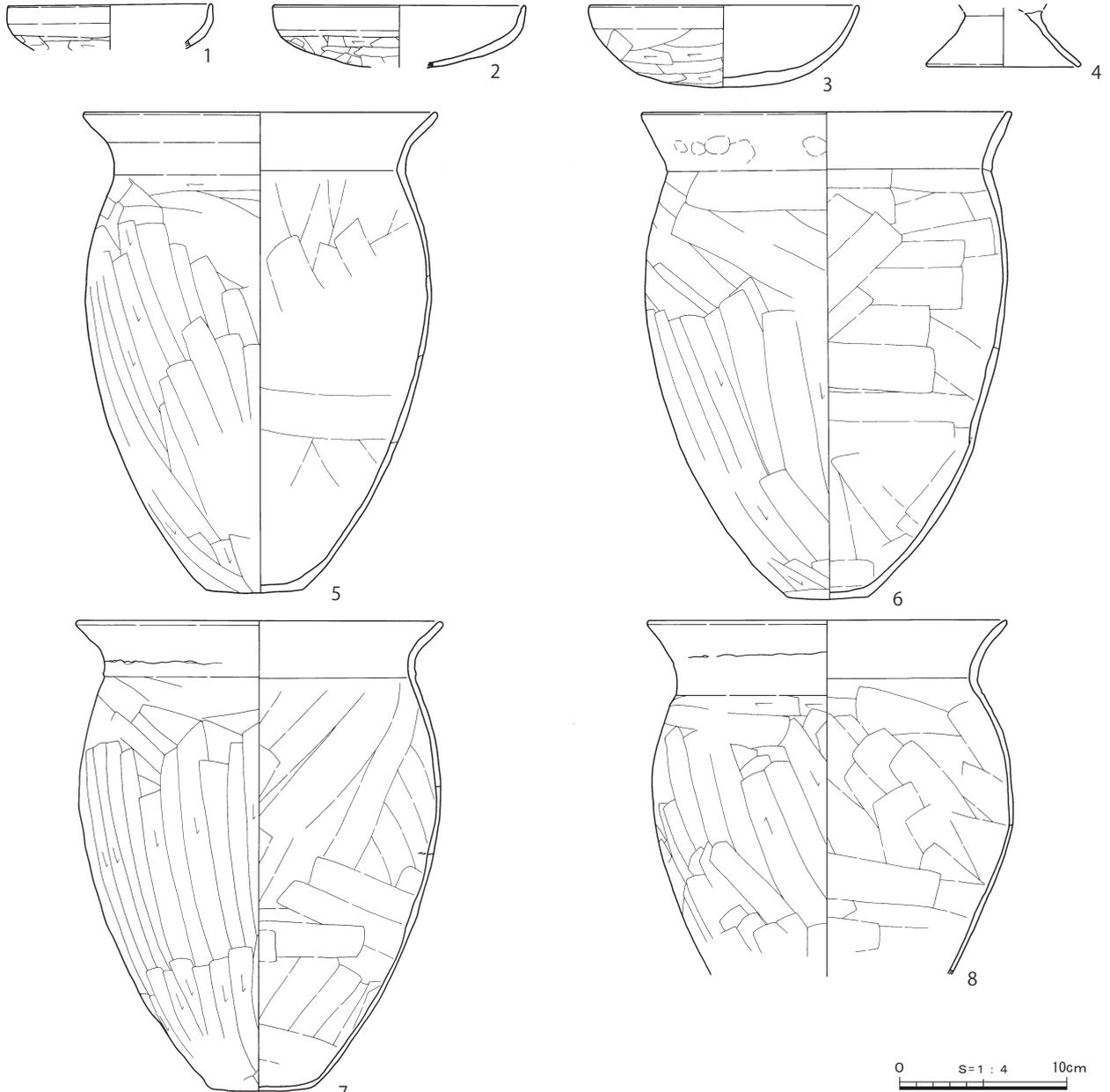
30号住居跡土層説明(2)

10. 灰黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ0.2~1.0cm)中量。焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
11. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~0.8cm)中量。粘土粒・焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
12. 黒褐色土 ローム粒中量。ロームブロック(φ0.2~1.0cm)少量。炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
13. 暗褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ0.2~2.0cm)・白色粉・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
14. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~1.0cm)中量。焼土・炭化物少量。しまりあり。粘性あり。
15. 黒褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(φ0.2~2.0cm)中量。粘土ブロック(φ0.2~1.0cm)・焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
16. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~1.0cm)多量。焼土・炭化物微量。しまりややあり。粘性あり。
17. 黒褐色土 ローム粒多量。粘土粒・粘土ブロック(φ0.2~3.0cm)・焼土中量。炭化物少量。しまりあり。粘性あり。

30号住居跡カマド土層説明

1. 灰黄褐色土 粘土粒・ブロック(φ0.2~1.0cm)大量。焼土多量。ローム粒・ロームブロック(φ0.2~2.0cm)中量。炭化物少量。しまり弱い。粘性あり。
2. にぶい赤褐色土 焼土大量。焼土化した粘土(φ0.2~0.5cm)多量。炭化物中量。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

3. にぶい褐色土 ローム粒多量。しまりやや弱い。粘性ややあり。
4. 灰褐色土 焼土多量。粘土粒・粘土ブロック(φ0.2~0.8cm)中量。ローム粒・炭化物少量。しまりややあり。粘性あり。
5. 黒褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ0.2~0.8cm)・炭化物中量。ローム粒・焼土少量。しまりややあり。粘性あり。
6. 黒褐色土 ローム粒・白色軽石少量。焼土微量。しまりあり。粘性ややあり。
7. 灰黄褐色土 粘土粒・粘土ブロック(φ0.2~0.8cm)・炭化物多量。ローム粒・ロームブロック(φ0.2~0.5cm)微量。しまり・粘性やや強い。
8. 黒褐色土 ローム粒・粘土粒・焼土少量。炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
9. 黄褐色土 ローム主体に暗褐色土少量。しまりあり。粘性あり。
10. 灰黄褐色土 粘土多量。焼土少量。炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
11. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~0.8cm)主体。焼土微量。しまりやや弱い。粘性あり。
12. 灰黄褐色土 粘土主体にローム粒・ロームブロック(φ0.2~1.0cm)少量。焼土微量。しまりやや強い。粘性あり。
13. 暗褐色土 ローム粒中量。ロームブロック(φ0.2~0.8cm)少量。しまりあり。粘性あり。
14. 灰黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~0.5cm)・粘土(φ~0.8cm)多量。白色粒少量。炭化物微量。しまり・粘性強い。
15. 灰黄褐色土 ロームブロック(φ0.2~0.8cm)・粘土(φ~0.8cm)中量。ローム粒少量。焼土・炭化物微量。しまりあり。粘性あり。
16. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~0.8cm)中量。焼土・炭化物・白色粒微量。しまりあり。粘性あり。



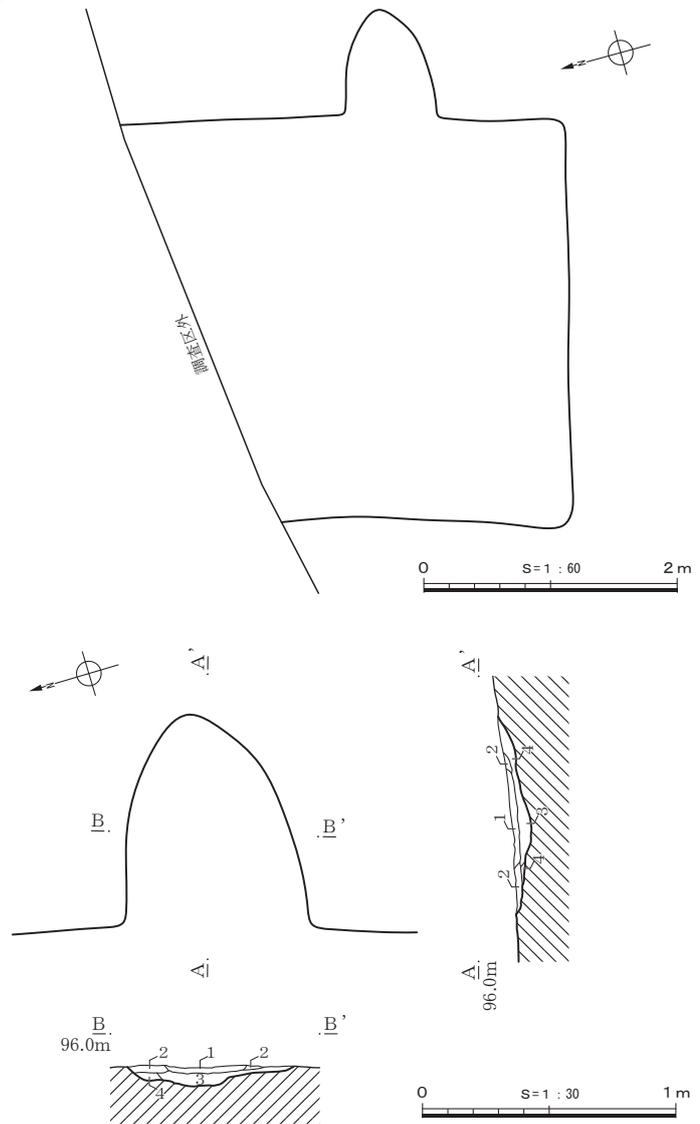
第21図 30号住居跡出土遺物

表9 30号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口径(12.3)。残存高2.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 黒色粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部～体部1/5。H. 覆土。
2	坏	A. 口径16.1。器高4.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。底部ナデ。内面、ナデ。D. チャート・角閃石・細砂粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部～体部1/4。H. 覆土。
3	坏	A. 口径(15.2)。残存高3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子・角閃石。E. 内外一橙色。F. 口縁部～底部1/2。H. 覆土。
4	台付甕	A. 底径(9.2)。残存高3.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、脚部ヨコナデ。内面、脚部ヨコナデ。D. 白色粒子片岩。E. 内一橙色。外一にぶい橙色。F. 脚部7/4。H. 覆土。
5	甕	A. 口径(21.2)。底径5.8。器高32.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒子。E. 内外一橙色。F. 1/2。H. カマド。
6	甕	A. 口径22.1。底径4.8。器高29.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ・指頭圧痕。胴部～底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒子・黒色粒。E. 内外一橙色。F. 4/5。H. カマド。
7	甕	A. 口径(22.0)。底径6.0。器高28.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒子・角閃石。E. 内外一橙色。F. 1/2。H. カマド。
8	甕	A. 口径21.6。残存高21.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒子。E. 内外一橙色。F. 口縁部～胴部中位3/5。H. カマド。

31号住居跡(SI-31)(第22図/写真図版8)

位置：X=21949～21953、Y=-62126～-62131。南側が検出され、北側は調査区外である。6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は判然としない。形態・構造：平面形態は、方形基調と考えられる。主軸方位は、N-75°-W、規模は、残存南北軸3.5m、東西軸3.22mと推測される。遺構検出面が床下という状態であるため、付帯施設等はカマドの掘り込みがわずかに遺存している程度であった。カマド：東壁の南寄りに構築される。壁外へ84cm、幅71cmを測る。埋没状態：調査区北壁の土層観察をしたが、ほぼ全体を耕作により壊されていた。遺物：出土しなかった。



31号住居跡カマド土層説明

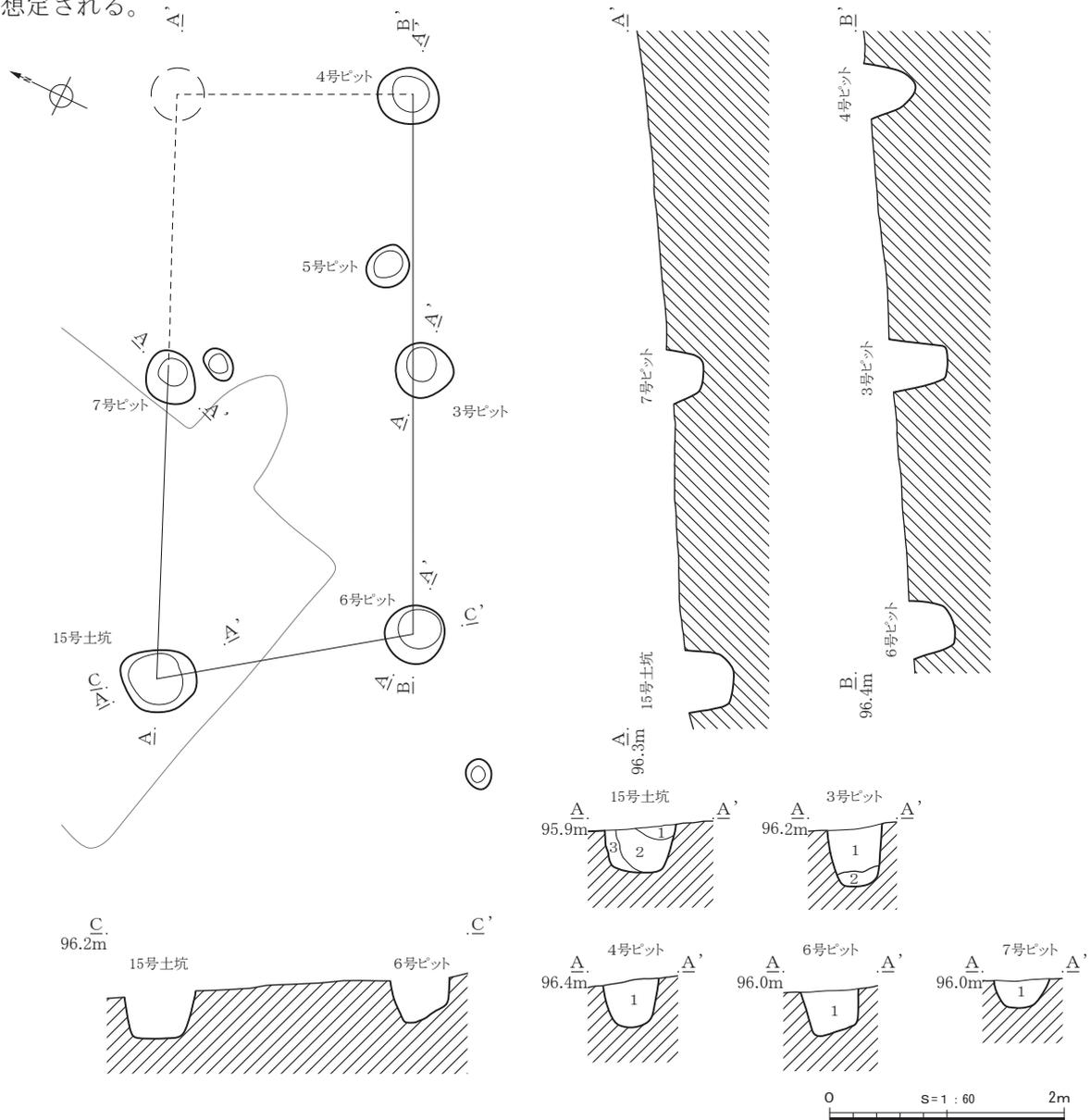
1. にぶい赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック(φ0.2～2.0cm)多量。ローム粒・炭化物微量。しまり・粘性ややあり。
2. 暗褐色土 焼土・炭化物・ローム粒少量。しまり・粘性ややあり。
3. 明赤褐色土 焼土を主体とする白色粒微量。しまりはあるが、粘性はない。
4. 暗褐色土 焼土少量。炭化物・白色粒微量含む。しまりあり。粘性ややあり。

第22図 31号住居跡

3 掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡 (SB-06) (第 23・24 図、表 10/ 写真図版 9・13)

位置：調査区の北側に位置する。31号住居跡と重複するが、新旧関係は判然としない。主軸方位：N - 63° - E。形態：北東隅の柱穴は、木根による影響により確認することができなかったが、2軒×1軒の側柱建物跡と想定される。規模：南北方向(15号土坑から6号ピットの柱間距離)は2.3m、東西方向(4～6号ピットの柱間距離)は4.7mを測る。各柱穴の規模等については、表14・15を参照されたい。遺物：各柱穴(15号土坑、3・4・6号ピット)から出土した遺物については、周辺遺構からの流入したものと考えられる。時期：重複遺構や出土遺物から、平安時代に構築されたものと想定される。



第 23 図 6号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡土層説明 (1)

15号土坑

1. 暗褐色土 炭化物多量、汚れたローム粒・ロームブロック (φ 0.2～2.0cm) 少量、焼土を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2～3.0cm) 多量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
3. にぶい黄褐色土 ローム粒大量、ロームブロック (φ 0.2～2.0cm) を多量含む。しまりやや弱い。粘性ややあり

3号ピット

1. 黒褐色土 汚れたローム粒・ロームブロック (φ 0.2～3.0cm) 多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック (φ 0.2～0.8cm) を多量含む。しまりやや弱い。粘性あり。

4号ピット

1. 黒褐色土 汚れたローム粒・ロームブロック (φ 0.2～3.0cm) 多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。

6号掘立柱建物跡土層説明(2)

5号ピット

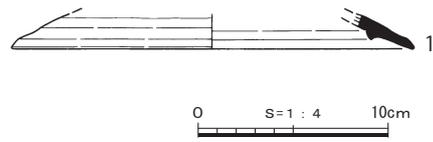
1. 黒褐色土 汚れたローム粒・ロームブロック(φ0.2~3.0cm)多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。

6号ピット

1. 黒褐色土 汚れたローム粒・ロームブロック(φ0.2~3.0cm)多量、焼土・炭化物・白色粒を微量含む。しまり・粘性あり。

7号ピット

1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.2~2.0cm)多量、焼土を微量含む。しまり・粘性ややあり。



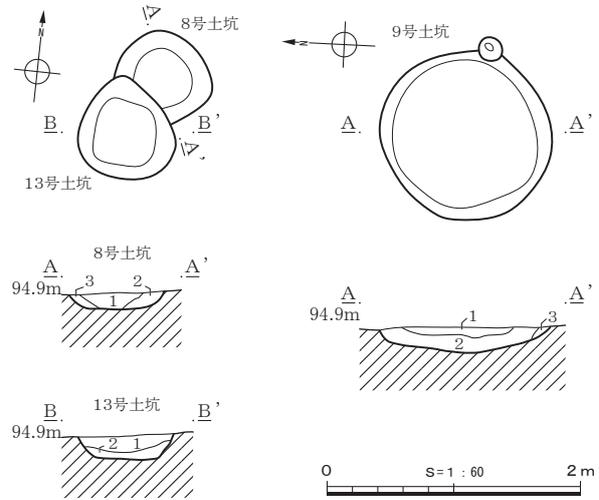
第24図 3号ピット出土遺物

表10 3号ピット出土遺物観察表

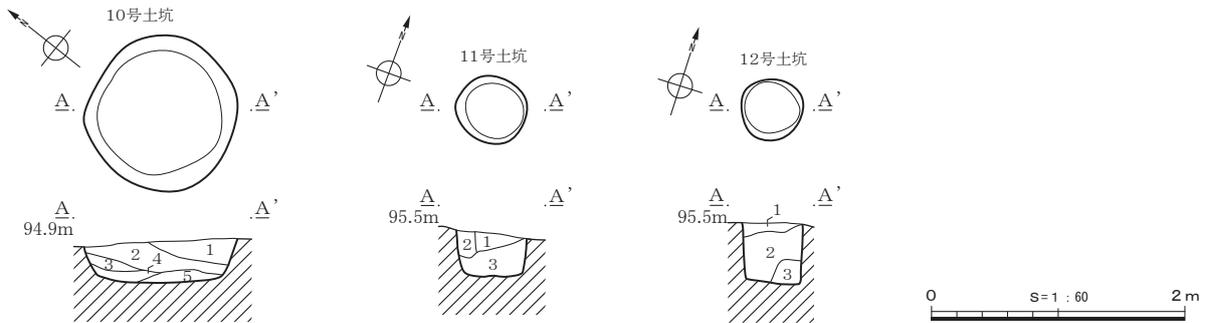
1	須恵器蓋	A. 口縁部径(21.0)。残存高1.8。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。D. 白色粒子・チャート。E. 内外面にぶい黄色。F. 天井部~口縁部1/8。G. 中性焔。H. 覆土。
---	------	--

4 土坑(第25~27図、表11・14/写真図版9・10・13)

土坑は本遺跡内から7基(8~13・15)確認された。このうち、15号土坑については、6号掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。分布は、15号土坑以外は2号溝跡以南に広がる。形状について、平面形態は円形基調を呈し、断面形態は逆台形を主体とする。なお、調査時に遺構名を付した7号土坑は植物の根穴痕、14号土坑については26号住居跡の掘り方と考えられたため、整理作業・報告書作成時に欠番扱いとした。各土坑から出土した遺物については、周辺遺構から流入したものと考えられる。



第25図 8・9・13号土坑



第26図 10~12号土坑

8~10号土坑土層説明

8号土坑

1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを中量含む。しまり・粘性あり。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1.0cm)を少量含む。しまり弱い。粘性あり。
3. 褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1.0cm)を中量含む。しまり・粘性あり。

9号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性あり。
2. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ0.5~2.5cm)を少量含む。しまりやや弱い。粘性あり。
3. 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。しまり弱い。粘性あり。

10号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1.0~3.0cm)少量、焼土粒を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ2.0cm)多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
3. 黒色土 ローム粒を微量含む。しまり・粘性あり。
4. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ1.0~2.0cm)を中量含む。しまり・粘性あり。
5. 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまり・粘性あり。3層に似るがやや明るい。

11～13号土坑土層説明

11号土坑土層説明

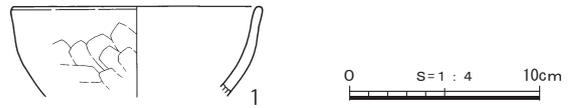
1. にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）多量、黒褐色土を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）を少量含む。しまり・粘性あり。
3. 暗褐色土 ローム粒大量、ロームブロック（φ 0.2～1.5cm）多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。

12号土坑土層説明

1. 黄褐色土 ローム粒大量、ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック（φ 0.2～2.0cm）少量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
3. にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～3.0cm）を主体とする。黒褐色土を少量含む。しまり・粘性あり。

13号土坑土層説明

1. 褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～5.0cm）多量、炭化物を微量含む。しまりややあり。粘性あり。
2. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）を少量含む。しまり・粘性あり。



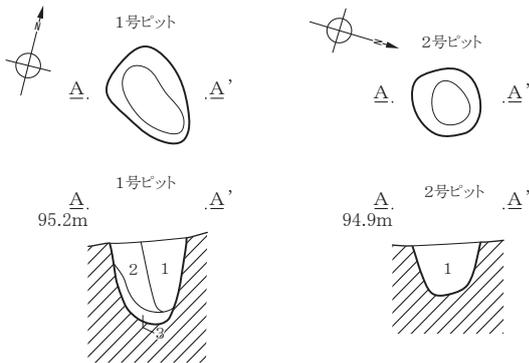
第27図 9号土坑出土遺物

表11 9号土坑出土遺物観察表

1	坏	A. 口径(13.2)。残存高4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ→ミガキ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒子・細砂粒。E. 内外-黄褐色。F. 口縁部～体部 1/7。H. 覆土。
---	---	--

5 ピット（第28図、表15）

ピットは本遺跡内から7基（1～7号ピット）が確認された。このうち、3・4・6・7号ピットの4基は規則的な配列が見られたため、掘立柱建物跡（SB-06）の柱穴と想定した。各ピットから出土した遺物については、周辺遺構から流入したものと考えられる。

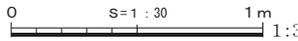


1号ピット土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒少量、焼土・炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～1.0cm）多量、炭化物を微量含む。しまり・粘性あり。
3. 黄褐色土 ローム主体に暗褐色土少量含む。しまり・粘性あり。

2号ピット土層説明

1. にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロック（φ 0.2～0.5cm）を多量含む。しまり・粘性あり。

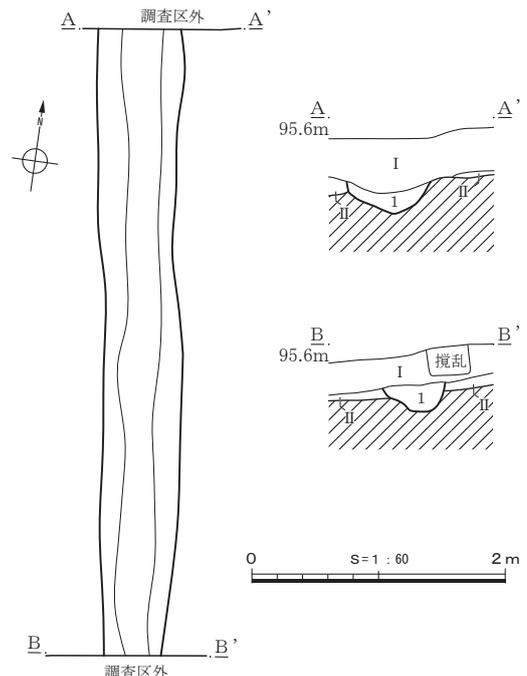


第28図 1・2号ピット

6 溝跡

2号溝跡（SD-02）（第29・30図、表12/写真図版10）

位置：調査区の北側中央寄りに位置し、北・南側の両端部は調査区外へ延びる。形態：南北方向へ直線的に走行する。主軸方位は、N-7°-Wを指す。規模は上端幅0.45m～0.69m、下端幅0.19m～0.32mを測る。確認面からの深さは32cmで、断面形態は逆台形状を呈す。底面の標高は南端95.03m、北端94.77mで、起伏が著しい。埋没状態：覆土下層には薄く暗褐色土が堆積するが、覆土の大半は浅間A軽石を多量に含む。遺物：覆土中から、土師器片が少量と、古銭（1）が出土した。時期：覆土中に浅間A軽石の混入がみられることから、近世以降に帰属すると考えられる。備考：本遺構は地形の傾斜に対し並行に走行して



第29図 2号溝

いることから、集落域と山林を区分けするための「根切り溝」の類いであろうか。

2号溝土層説明

- I. 暗褐色土 ローム粒・汚れたロームブロック(φ 0.2~2.0cm)中量、焼土・炭化物・白色粒少量、小礫(φ 1.0~2.0cm)を微量含む。しまり・粘性ややあり。
- II. 暗褐色土 汚れたローム粒・ロームブロック(φ 0.2~2.0cm)中量、浅間A軽石カ少量、焼土・炭化物・小礫(φ 1.0~5.0cm)を微量含む。しまり・粘性ややあり。
- 1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ 0.2~2.0cm)・浅間A軽石カを多量含む。しまり・粘性やや弱い。



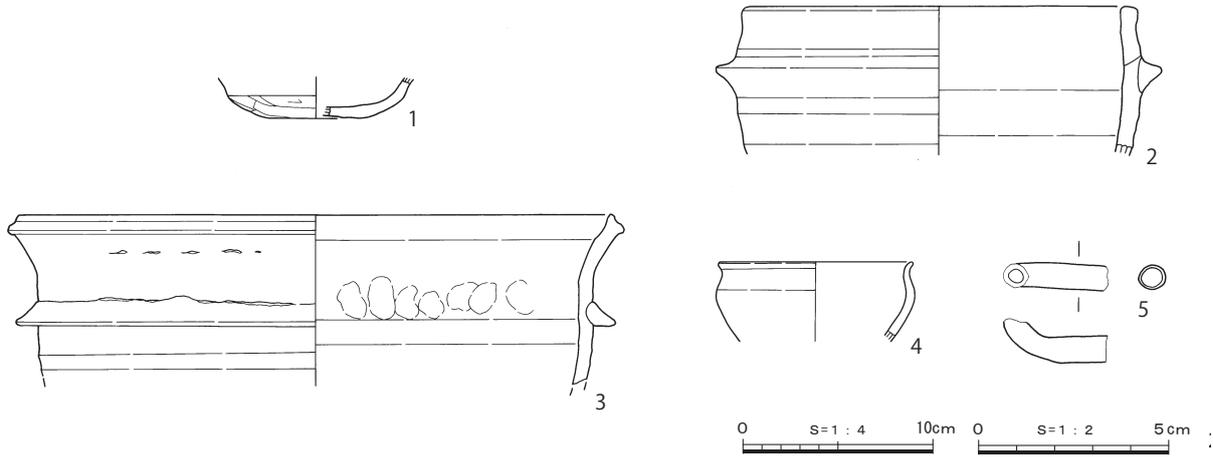
第30図 2号溝出土遺物

表12 2号溝出土遺物観察表

1	古銭	A. 直径(2.2)。厚さ0.05。重さ1.17。F. ほぼ完形。G. 「皇宋通寶」か。H. 覆土。
---	----	--

7 遺構外出土遺物(第31図、表13/写真図版13)

ここでは、表採や調査区一括資料、および出土した遺構には共伴しないと判断した資料のうち、5点を掲載した。1は調査区一括資料の土師器坏、2は表採資料の羽釜、3は表採資料の大形甑である。1~3については、周辺の住居跡等に帰属するものと思われる。4は瀬戸・美濃焼の天目茶碗で、大窯期のものと考えられる。5は青銅製品で、煙管の雁首部分である。



第31図 遺構外出土遺物

表13 遺構外出土遺物観察表

1	坏	A. 底径(5.2)。残存高2.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。底部ナデ。内面、ヨコナデ。D. 片岩・赤褐色粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部~底部1/5。H. 調査区。
2	羽釜	A. 口径(20.7)。残存高7.9。B. ロクロ成形。C. 内外面、口縁部~胴部上位回転ナデ。D. 白色粒子。E. 内一にぶい黄橙色。外一灰黄色。F. 口縁部~胴部上位1/8。G. 酸化焰気味。H. 調査区。
3	大形甑	A. 口径(31.3)。残存高8.5。B. ロクロ成形。C. 内外面、口縁部~胴部上位回転ナデ。D. 雲母・角閃石・細砂粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部~胴部上位1/8。G. 酸化焰。H. 表採。
4	陶器 天目茶碗	A. 口径(10.1)。残存高4.2。B. ロクロ上での粘土積み上げ。C. 内外面、回転ナデ。D. 黒色粒子。E. 内外一極暗褐色。胎土一淡黄色。F. 口縁部~体部上半1/8。G. 内外面に鉄釉を施す。瀬戸・美濃産か。H. 調査区。
5	銅製品 煙管	A. 残長2.8。幅0.7。厚さ0.1。重2.96。G. 雁首片。H. SI-28覆土。

表 14 土坑計測表

番号	位置	長軸方位	平面形状	長径	短径	深度	重複	備考・遺物
SK-8	X=21943 ~ 21944, Y=-62140 ~ -62141	N-21° -W	不整円形	71	[65]	20	SK-13	土師器片。
SK-9	X=21939 ~ 21941, Y=-62142 ~ -62143	N-51° -W	楕円形	135	128	24	ピット	土師器片。
SK-10	X=21947 ~ 21948, Y=-62142 ~ -62143	N-86° -W	不整円形	117	114	29		土師器(坏・甕)片。
SK-11	X=21927 ~ 21928, Y=-62138	N-75° -W	楕円形	55	50	34		
SK-12	X=21928, Y=-62137 ~ -62138	N-62° -E	不整円形	48	47	51		土師器片。
SK-13	X=21943 ~ 21944, Y=-62141 ~ -62142	N- 0°	不整形	81	76	23		
SK-15	X=21950 ~ 21951, Y=-62129	N-31° -W	不整形	61	52	40	SI-31, ピット	

表 15 ピット計測表

番号	位置	平面形状	長径	短径	深度	重複	備考・遺物
1号ピット	X=21929, Y=-62139	不整形	40	27	34		
2号ピット	X=21946, Y=-62141	不整円形	27	26	21		
3号ピット	X=21949 ~ 21950, Y=-62126	不整円形	48	45	47	SB-06 掘立	土師器(坏・甕)片。
4号ピット	X=21950 ~ 21951, Y=-62124	円形	51	47	41	SB-06 掘立	土師器(甕)片。
5号ピット	X=21950, Y=-62125	不整円形	38	33	30		
6号ピット	X=21948 ~ 21949, Y=-62128	円形	51	49	36	SB-06 掘立	土師器(坏・甕)片。
7号ピット	X=21951 ~ 21952, Y=-62127	不整円形	45	42	29	SB-06 掘立	

VI まとめ

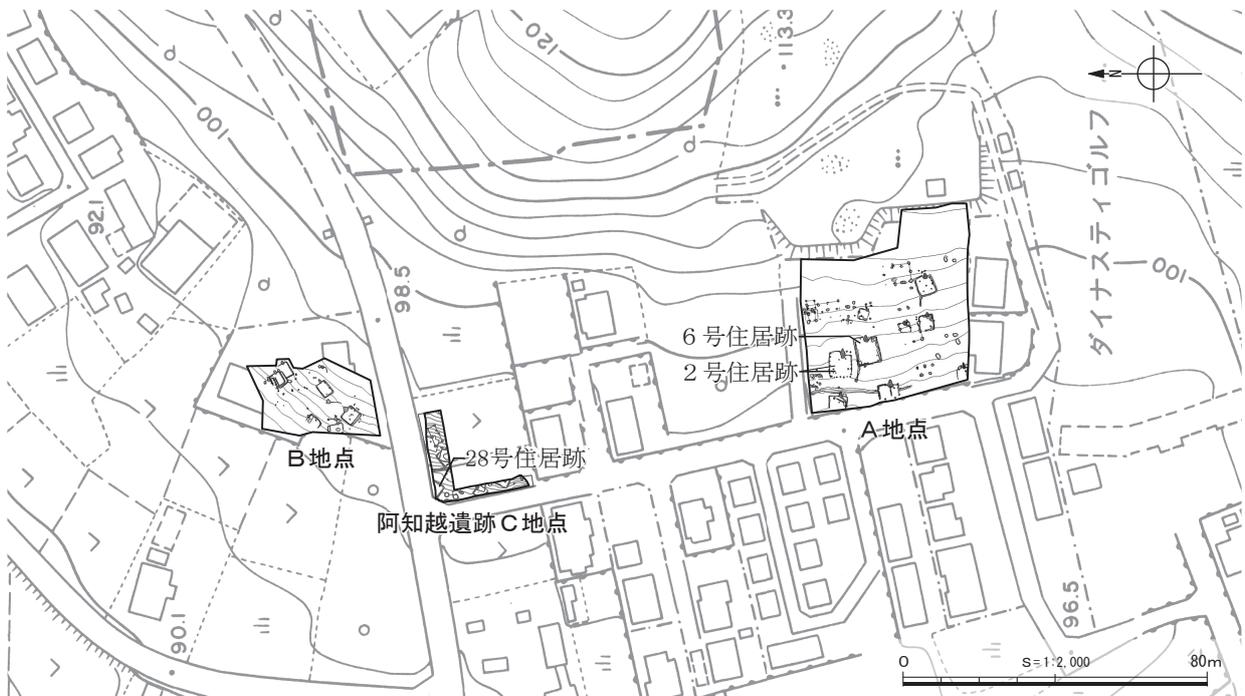
今回の調査では、主に奈良時代から平安時代の竪穴住居跡 8 軒を含む遺構が検出された。阿知越遺跡は過去に A・B 地点の発掘調査が行われており、C 地点はその中間に位置する。これらの報文や発掘調査等により、標高の高い区域では遺構が検出されず、一定の標高に当該期の集落域が帯状に展開しているという見解が示されるが、本地点の調査はその見解を裏付けることとなった。

ここでは、他住居跡とは異なる堆積及び遺物出土状況が確認された 28 号住居跡について若干の補説を行い、結語としたい。

28 号住居跡では、調査区北壁壁面において土層の堆積状況を観察し、併せて遺物出土状態を観察した。埋没過程は同遺構が廃絶されてわずかに自然埋没した後、東半側の中層～下層にローム(粒・ブロック)を多量に含んだ 6 層が堆積する。この土層は非常に特徴的で、標高の高い東側から同遺構の中央寄りにまで人為的に埋められ、その後は再び自然埋没をしたものと考えられる。遺物の出土状況をみると、その出土量は他住居跡に比べて突出して多く、その大半はこの 6 層に伴うものであった。このことから、28 号住居跡は何らかの理由で人為的に埋め戻され、出土した遺物の大半は住居跡の使用時のものではなく廃絶後の投棄行為によるものと推測される。遺物は、鉄製品や銅製品等は含まれなかったものの、わずかだが須恵器の大甕や墨書土器なども出土しており、南方約 120 m に位置す

阿知越A地点6号住居跡の出土遺物と器種構成に類似性が見られる。同住居跡はおよそ9世紀後半に属するもので、一辺6mを超える大型住居跡である。柱穴の一部に礎石を有し、その構造や遺物の出土状態にやや特殊性を持つ。遺物は土師器（坏・埴・高台付埴・鉢・甕・台付甕）、須恵器（坏・蓋・大型広口壺）、灰釉陶器長頸瓶、鉄製品（紡錘車・鎌・刀子・鋤先など）、銅製品等が大量に出土し、墨書土器の集中もみられる。また、焼失により溶解した銅塊が、周囲から出土した銅鍔の丸鞆裏金具や巡方に係るものと考えられ、同2号住居跡とともに有力層の住居跡と想定されている。

28号住居跡は、このA地点6号住居跡と同時期のもので、相互に何らかの関連性があったことは想像に難くない。28号住居跡は部分的な調査であったため不明な点が多く、有力層であるA地点6号住居跡との従属関係等については言及できない。ただ、墨書土器が出土していることなどを勘案すると、28号住居跡も有力層の住居跡である可能性を否定できない。両住居跡は主軸方位を異にしており、別単位の「集落」と捉えることもできよう。今後は調査事例の増加を待ち、阿知越遺跡及び周辺地域の実態について、さらなる解明がなされることを期待したい。



第32図 阿知越遺跡位置図

【引用・参考文献】

- 赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
（助埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
- 井上尚明 1986『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
（助埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
- 笠原仁史 2009『女池遺跡Ⅲ』本庄市遺跡調査会報告書26集 本庄市遺跡調査会
- 埼玉県 1984『埼玉県史 資料編3 古代Ⅰ』
- 鈴木徳雄 1983『阿知越遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第3集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 1984『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第4集 児玉町教育委員会
- 利根川章彦 1998『御林下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第223集（助埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
- 鈴木徳雄 2007『吉田林割山遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第16集 本庄市遺跡調査会

写真図版



遺跡の位置と周辺の地形（上が北）

写真図版 2



調査区遠景
(東から)



調査区全景
(北西から)



調査区北半側
(西から)



調査区南半側
(北から)



24号住居跡全景
(南西から)



25・26号住居跡全景
(南西から)

写真図版4



25号住居跡遺物出土状況
(北西から)



25号住居跡遺物出土状況近景
(東から)



26号住居跡カマド全景
(南西から)



27号住居跡全景
(南から)



27号住居跡カマド遺物出土状況
(南から)



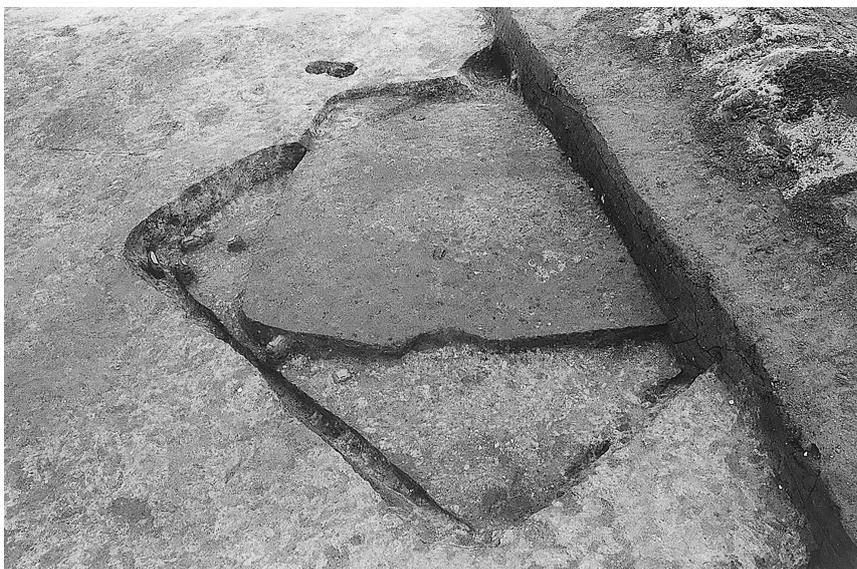
28号住居跡全景
(南から)



28号住居跡遺物出土状況
(南西から)



28号住居跡遺物出土状況近景
(西から)



29号住居跡全景
(西から)



29号住居跡カマド全景
(西から)



30号住居跡遺物出土状況
(南西から)



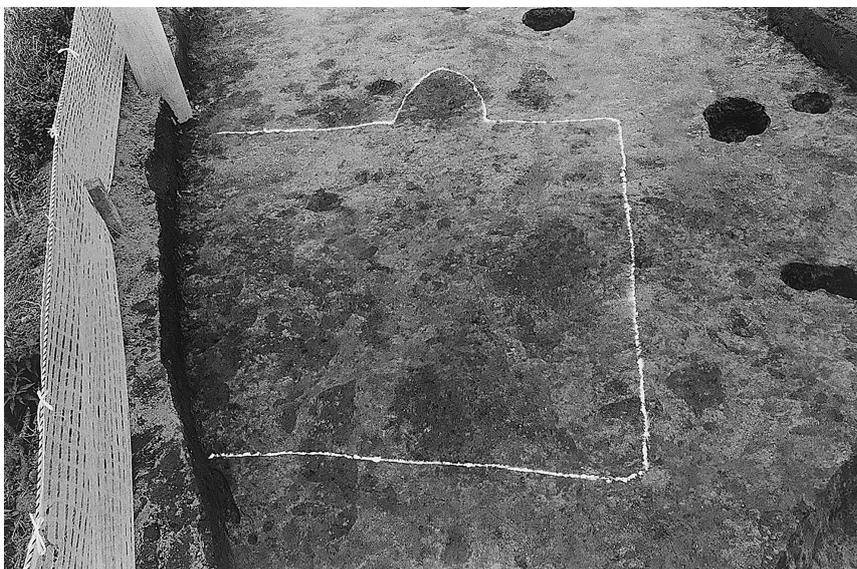
30号住居跡遺物出土状況近景
(南西から)



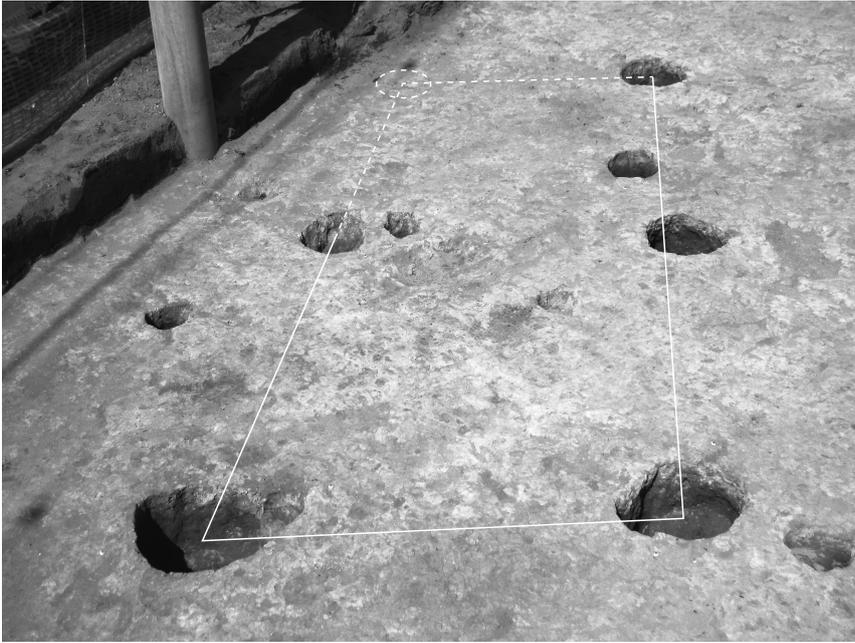
30号住居跡全景
(南西から)



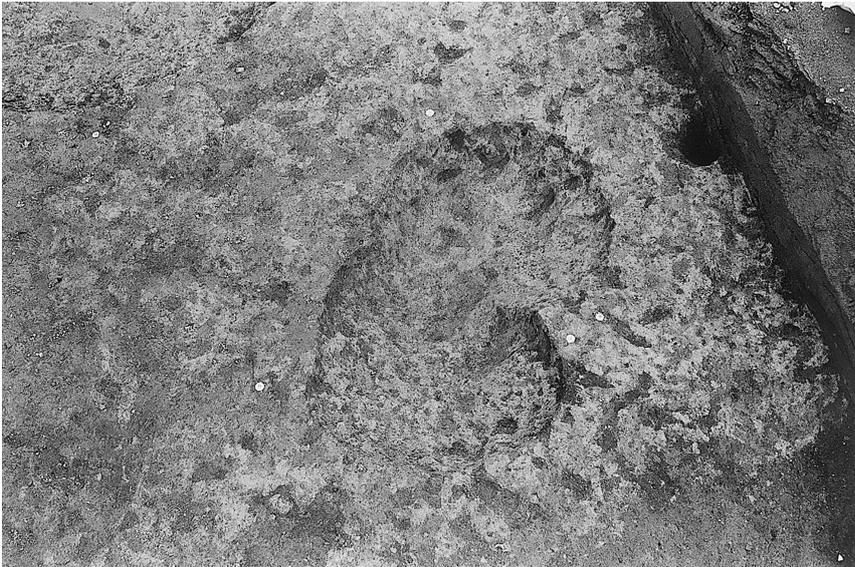
30号住居跡カマド全景
(南西から)



31号住居跡全景
(西から)



6号掘立柱建物跡全景
(南西から)



8・13号土坑全景
(南から)



9号土坑全景
(東から)



10号土坑全景
(南東から)



11・12号土坑全景
(北西から)



2号溝全景
(東から)



1



2



3



4

24号住居跡出土遺物



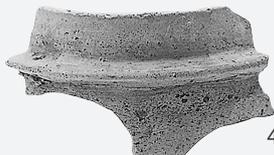
1



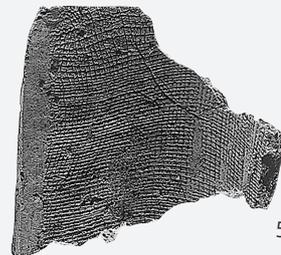
2



3



4



5



6



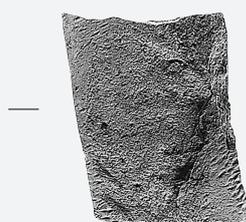
9



7



10



8

25号住居跡出土遺物



1



2



3



4

26号住居跡出土遺物



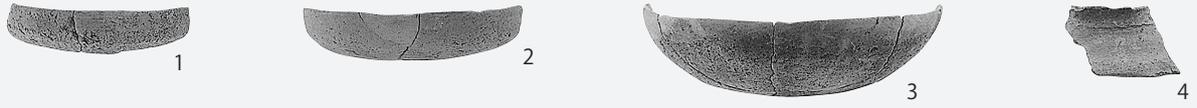
1



2

27号住居跡出土遺物





30号住居跡出土遺物



9号土坑出土遺物



3号ピット出土遺物



2号溝出土遺物



遺構外出土遺物



報告書抄録

ふりがな	あちごえいせきさん							
書名	阿知越遺跡Ⅲ							
副書名	C地点の調査							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	山本千春							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月9日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
阿知越遺跡 (C地点)	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 こがまちよういりあざみあざ 児玉町入浅見字アチ こえ 越1125番地12	市町村 112119	遺跡 番号 54-040	36° 11' 44"	139° 08' 32"	20110607 ～ 20110628	176.4 m ²	集合住宅建設に伴う発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
阿知越遺跡 (C地点)	集落跡	奈良～平安時代 近世以降		竪穴住居跡 8軒 掘立柱建物跡 1棟 土坑 7基 ビット 7基 溝跡 1条	土師器・須恵器・石器(砥石)・片岩・鉄製品(釘)・鉄滓・陶器・銅製品(古銭・煙管)			

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第29集

阿知越遺跡Ⅲ

－C地点の調査－

平成24年3月2日 印刷

平成24年3月9日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社